

魔法科高校で一目惚れしました！！！！

んーのん！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

入学式の日にはほのかに一目惚れをしたちよつと変わったオリ主のお話です。

森崎「ウィードがブルームと釣り合うわけないんだ!!!」

オリ主「愛の前ではそんなこと関係ない!!!」

オリ主「ほのかさん!!大好きです!!!」

ほのか「そんな恥ずかしいこと大声で言わないで!!!」

こんな感じ

目次

プロローグ 「僕たちは婚約者なんだ!!!」	1
第1話 「ほのか、ビンタはダメ」	4
第2話 「僕の名前は森崎だ!!」	15
第3話 「ぼくのなまえはもりさきだ…」	26
第4話 「雫はいつまで写真撮ってるのよ!？」	34
第5話 「うんタ行で区切るのやめよ?」	43
第6話 「僕はバカじゃない!!」	52
第7話 『この学校に用務員なんていねえ!!!』	62
第8話 「好きじゃ!!!」	71
第9話 「もし私も恭弥が好きだって言ったらどうする?」	80

プロローグ 「僕たちは婚約者なんだ!!!」

「ウィード風情が、ブルームの席に座るんじゃない!!!」

「愛の前にはブルームもウィードも関係ない!!!」

国立魔法科大学付属第一高校の入学式、そこでは2人の新入生が激しい言い争いをしていた…

「スペアの分際で俺たち一科生に釣り合いが取れるわけないだろう!!!」

「スペアだろうがなんだろうが僕だって人間なんだ!!人を好きになることの何が悪い!!」

「いいからとにかく落ち着いてよ!」

「待っててほのかさん、今すぐこの邪魔な人をどこかへ行かせてあげるから」

「そうゆうことじゃなく「だいたいなんで見ず知らずのキミが僕たちの邪魔をするんだ!!」…いや話聞いて!!それに私たちもさつき知り合ったばかりでしょ!!」

「お前が立場もわきまえずにこんなところでさわぐからだろうが!!」

「別にほのかさんに愛を囁いていただけだろ!!キミになんの関係があるって言うんだ!」

「もう恥ずかしいからそうゆうこと言うのやめて!!」

「うるさい、ウィードが口答えなんてするな!!そもそもその子も嫌がってるじゃないか!!」

「え、いやその「嫌がってなんかいない!!僕たちは愛し合っているんだ!!!」…へ、わ、私は別に愛してなんかいないよ!」

「そうだよ、ほのかは入学試験の時に一目惚れした人がいるんだよ」

「ちよつと雫!?!こんな所でそんなこといわ「なんだって!!それは一体誰なんだ!?!」…ほらこうなる…」

「ハッ、ザマアねえなあ!!ウィードごときが偉そうにしてるからだ!」「うるさい!僕たちは婚約者なんだ!!きつとそれも僕のことには決まってる!!!」

「違うよ!? さつきも言ったけど私たち今さつきはじめて会ったばかりでしょ!？」

「あなたが求婚してほのかは驚いていただけ。それに一目惚れした人も違うよ。イケメンだったって言ってた」

「もう雫!! 余計なこといわ「なんだって!! それは僕の顔が醜いということなのか!? 酷いよほのかさん!!」…誰もそんなこと言ってないよ!!」

「そうだ!! 容姿も醜い補欠が! その子と全然釣り合っていないぞ!!!」

「なんでそんなこと言うんだ!! 容姿なんてどうしようもないじゃないか!？」

「大丈夫だよ。確かにほのかとは釣り合っていないけどあなたは良く思えば中の上はある。あの人は高く見積もっても中の中が最高。あの人も上」

「んなっ!! そのお前、ウイードの味方するのか!？」

「本当のことを言っただ「やった!! 僕かっこいい方なんだってほのかさん!! ほのかさんはどう思うかな!？」…まだ話してる途中…」

「え、う、うん、いいんじゃないかな「やったー!!! それじゃあほのかさん、僕と結婚してくれるんだね!？」…って、話が飛躍しすぎだよ! 誰もそんなこと言ってないよ!!!」

「ほ、僕は…」

「そんな!? ほのかさんは僕が嫌いだってゆうのかい!？」

「それも言ってないよ!! そもそもまだ知り合ったばかりなのにそんなことかかんがえられないよ!？」

「でもほのかさんも一目惚れしたって…」

「だからって結婚は早すぎるよ!? そもそもあなたのことじゃないよ!!!」

「ほ、僕は…」

「なんだって!!! じゃあ誰だって言うんだ!!!」

「そ、それは…まだ名前も知らないけど…」

「僕はブサイクじゃない!!!」「うるさい!!! 今ほのかさんと大事な話をしているんだ!!! 邪魔しないでくれ!!!」…んなっ

「フツ」

「雫!!笑ったら失礼だよ!？」
「く、クソツ!!僕を馬鹿にするんじゃない!!」
「だからうるさいって言ってるじゃないか!?なんで邪魔するんだ!!僕は今ほのかさんと大事な話をしているんだ!!!ま、まさか、キミもほのかさんに惚れているんじゃないだろうな!？」
「はあ!?そんなわけな」「この美貌に加えてこの豊満な胸だ!!キミが惚れてしまっても仕方がないことだ」…人の話を聞け!!」
「胸とかそんなこと言わないで!？」
「僕は別に惚れてなんかい」「だかしかし!!ほのかさんは僕のものだ!!」
「…だから聞けよ!？」
「ほのかさん!!あんなやつより僕の方がいいですよね!？」
「どつちも嫌だよ!!」
「なんで僕まで振られたみたいにならないといけないんだ…」
「なんだって!!僕のどこがダメだって言うんだ!？」
「そうゆうところだよ!!!」
「どうゆうところだい!？」
「もういやー!!!」

これは騒ぎを聞きつけてきた風紀委員が来るまで続けられたのでした。

第1話 「ほのか、ビンタはダメ」

「だから何度も言ってるじゃないですか!!僕はただ好きな人にアタックをしていただけなんです!!」

「どうしてそれがなんであんな騒ぎになるのよ!!」

入学式が終わった後、僕は生徒会室に呼び出されていた。一体何がいけなかったんだらう。ただ僕はほのかさんに惚れただけなのに…

「はあく、恋は盲目とはよく言ったものねえ」

真由美さんがため息をつく。真由美さんもなかなか美人で身長が低い割りに巨乳だがそれでもほのかさんには敵わないな。

「だからといって普通こんなことにはなりませんよ」

りんちゃんさんもなかなか美人だ。この学校は美人が多いようだ。総代の人もなかなかのものだった。しかしその中でもやはりほのかさんはずば抜けて可愛い。あれはまさに天使だ。いや、もしかしたら女神なのかもしれない。

「もうこれ以上話してもキリがないので今日のところは不問にしておきますが、こんな騒ぎはもう起こさないように!」

え?キリがない?もしかしてそれは…

「それはつまり僕はもうほのかさんに告白してはいけないということですか!?!」

「どうしてそうなるの!?!」

「違うんですか!?!」

「違うに決まってるでしょ!!!」

「やった!!!」

なんだ、焦らさないで下さいよ。もう僕はこの学校をやめるしかほのかさんと付き合う方法はないのかと思ってしまうたじやないですか。

「もう疲れた…。えっと、西郷くんだったけ?」

「はい!!西郷恭弥です!!気軽に下の名前で呼んでもらって結構です!なんならあだ名をつけてもらっても構いません!どういたしますか?」

「あ、うん、西郷くん」

「それだと芸がありません！やはりあだ名にしましょう!!何かありませんか!？」

「え、あー、じゃあ恭ちゃん」

恭ちゃん…いい、最高だ。

「いい響きですね！流星は真由美さんです!!」

「あ、うん…てか下の名前…」

「あ!!!」

「今度は何…?」

「真由美さんもあだ名つけたほうがいいですか？」

「大丈夫、そうゆうのはそのほのかさんってことして？」

ほのかさんと、あだ名で呼び合う…

「そんなのできません!!!恥ずかしすぎます!!!恥ずかし死しちやいます!!!」

「公衆の面前でプロポーズまがいな事しておいてどの口が言うのよ!?!」

「落ち着いてまゆちゃん、そんなに怒ったらせつかくの可愛い顔が台無しですよ」

「かわいっ、て！誰のせいでこうなってると思ってるの!?!てかあだ名つけないで!!それにそんなこと他の女の子に求婚を申し込んでいた人に言われたって全く響かないわよ!!」

「響いてましたよね、会長」

「ちよ、りんちゃん!？」

結局昨日はあのあと1時間くらい真由美さんに説教をくらってしまいそのあとにすぐほのかさんを探したけれどすぐに帰っていたよ
うで1人で帰ることとなった。

そして次の日

僕のクラスはE組か。ほのかさんと同じクラスだといいなあ。で

もほのかさん一科生だから違うクラスになっちゃうのか…。

「はじめまして！僕は西郷恭弥！一年間よろしくね！」

やっぱり元気が一番！僕は元気よく教室のドアを開いて挨拶をする！

「……………」

あれ？誰も返事をしてくれない。あれ？誰も目を合わせてくれない…なんでだろう？まあ考えたって仕方がない。とりあえず席に座ろう。

ここが僕の席か…後ろの席の子はすでに他の子話をしている。よし、僕も挨拶をしよう！

「やあ、はじめまして！僕は西郷恭弥！気軽に恭弥って呼んでくれ！なんならあだ名でもいいよ！昨日真由美さんに恭ちゃんってあだ名をつけてもらったんだ！どうする？」

「真由美さんって誰だよ…まあいいや、俺は西城レオンハルトだ。とりあえず恭弥って呼ばしてもらおうことにするよ。俺もレオでいい、よろしくな」

「…司波達也だ。俺も恭弥と呼ばせてもらう。俺の方も達也でいい」

「よろしくね、レオ、たつつん！そちらの女性方は？」

「た、たつつん!?!」

「ぶ、あはは。私は千葉エリカ。私も名前のほうで。呼び方はエリカでいいわよ。よろしく」

「柴田美月です。私も名前の方で呼ばせてもらいますね。私のことも美月で大丈夫です。よろしくお願いします」

「ちよつと待て、たつつんってなんだ」

「よろしくね！エリカさん、美月さん」

「おい恭弥」

「なんだいたつつん」

「たつつんはやめてくれ」

「いいあだ名だと思っただけど…?」

「そうよ、私も呼んであげよっか？たつつんって」

エリカさんもそう思うみたいだ。なぜ嫌がるのだろうか？

「深雪もなかなかだとおも「ねえみんな!!」…なんか帰ってきた…」
僕は肝心なことを忘れていたみたいだ。だれかそれを知らないか
聞きに教室に戻った。よかった、まだ達也たちもいる。

「だれかほのかさんのクラス知らないかな!？」

「…そもそもそのほのかって子を誰も知らないんだ。わかるわけがな
いだろう」

「そ、そうだよね…。仕方ない、一科生のクラス全部見て回ってくるよ
!!」

言うやいなや僕はすぐさま走り出していた。

「…嵐のようなやつだな…」

お昼時間も終わり、僕は教室に戻ることにした。結局ほのかさんは
見つからなかった…どこかで入れ違いになっちゃったのかな…？

「よお恭弥、戻ってきたな。お目当ての人は見つかったのか？」

「やあれオ。それがどこを探しても見当たらなかったんだよ…てあれ
？エリカ今ちよつと怒ってる？何かあったのかい？」

「食堂で一科生とちよつとな…」

よくわからないけれど何かあったみたいだ。喧嘩とかしたのかな
？大丈夫かな？

そして放課後

「今度こそはほのかさんを探し出してみせるよ!!行ってくるね!みん
な、また明日!!」

「おう、また明日…てもういねえ…」

「ほんと、騒がしいやつだな」

「達也くんは深雪と帰る約束してるの？」

「ああ、深雪がこっちに来てくれるみたいだ」

「私たちもご一緒してもいいですか？」

「ああ、もちろんだ」

「深雪ってあの昼のすっげえ可愛い子だよな？達也の妹の…」

「あんたに深雪は無理よ」

「なっ、誰もそんなこと言っただろ!?」

なんでだろう…ほのかさんがいない!!もしかしたら今日は休みなのかな?ほのかさんどこにいるんだろう…

「…!?」

いた!!ほのかさんだ!!ほのかさんがいた!!何かトラブルでも起こったのかな、なにやらもめてるようだ。ほのかさん、大丈夫かな?え、CADを起動してる!?何があったんだろう!?あれは攻撃性魔法だ。危険だ!!

校内でのCADの使用が禁止なのは知っているけれど仕方がない。ほのかさんに何かがあってからでは遅いのだ!

手早く腕につけたCADを操作する。

「…加速^{アクセラ}」

僕の得意魔法、加速。みんながよく使う自己加速魔法の倍早くなる。この距離なら3秒もかからずほのかさんの元へたどり着ける!

「いい加減にして下さい!!深雪さんはお兄さんと帰るって言ってるでしょう!!一緒に帰りたいならくっついてきたらいいんです!」

あのメガネの女の子の言うことはもつともだ。だけれど、

「でも昼もあまり喋らなかつたし、何より二科生にはわからない話だつてあるんだ!」

「そうよ!ちよつと時間を貸していただくだけなんだから!」

他の一科生は言うことを聞かない。

「なんの権利があつて2人の仲を引き裂こうとするんですか!?!」

司波さんは二科生の人たちと仲よさようにしている。それは

ちよつとくやしければ今回のことは完全に一科生が悪い。司波さんの迷惑も考えないで、一科生になったことを誇りに思っていた自分がバカみたい…

「同じ新入生なのに、今の時点であなたたちがどれだけ優れているっていうんですか!?!」

「ブルームとウィードを同列に語らないでもらおう。昨日のわけわからないやつといい、ウィード風情が楯突くんじゃない!」

まさか、ここで攻撃魔法を!?

「二科生風情が!?!」

危ない!?

すると赤い髪の女の子が警棒のようなもので森なんちやらくんのCADを弾いた。すごい…なんな動きが出来る子もいるんだ…

でもとりあえず

「これで丸く収まつ…!」

「ブルームがウィードに劣るなどあつてたまるか!?!」

てなかつた。今度は他の子たちが魔法を使おうとしだした。やめようと即しても誰も聞こうとしない。こうなったら、

「ほのか、何する気!?!」

「私の魔法でみんなを止める!」

「ダメだよほのか!」

みんな静まつて!

あれ?なんだろう、後ろからすごい風が…

「へぶしつ!?!」

「きや!?!」

「やめなさい!自衛目的以外の…:あれ?恭弥くん!?!」

え、何かが急に私の方へ飛んできた。私はそれに押し倒されるように倒れてしまった。

それとだれかが止めに来てくれたみたい。この声は多分生徒会長だと思う。よかつた。

「ほのか!?!」

雫の声が聞こえる。それにしても一体何が…あ、私の魔法!?!

「ぎゃあああああ!!目が、目がああああ!!!」

この声昨日の!?それより大変!!私の閃光魔法がこの人の目の前で発動してしまつてみたい!!!

「ぐ、ごめんなさい!!」

ど、どうしよう、、、

「えっと、どうゆう状況これ?」

生徒会長が戸惑つてるみたい。うう、最悪、、、

「すみません、悪ふざけが過ぎてしまいました」

司波さんのお兄さん…みんなをかばってくれるの…?

「どうゆうことだ?」

風紀委員長も一緒だったんだ。お兄さん、大丈夫なのかな…?

というか、重い…

「森崎一門のクイツクドロウは有名ですから、後学のために見せてもらおうと思つたんです。あまりにも真に迫っていたため手が出てしまつてみたいです。それに条件反応で起動プロセスを実行するのは…流石は一科生です。彼女が使つた魔法も見たとおりの閃光魔法でしたでしょうか?」

「この魔法を使うことに気づいていたのか?」

「分析は得意ですので」

すごい、起動式が読めるなんて…

「ほう、君は誤魔化すのも得意らしいな。ならこっちの急に現れたやつこのことも誤魔化してみろ」

「彼は今閃光魔法を使つた彼女が魔法を発動しようとした姿を見て止めようと自己加速術式をつかつてきたのでしよう。そうしてここへたどり着くと同時に彼女の起動式を打ち消すために七草会長が放つた魔法に当たつたのだと思います」

「自己加速術式だと?そうだとしても流石に速すぎると思うが?」

「じ、自分、加速魔法は得意なんです…。僕は加速魔法に特化した人間なもんで」

あ、この人、昨日の人だ!あの、き、求婚してきた人だ…!昨日はこの人のおかげで大変な目にあつたけど、私を止めようとしてくれて

「たんだ…あとやつと私の上からどいてくれた…」

「ほう」

「摩利、もういいじゃない。それよりも恭弥くん、ごめんなさいね。大丈夫かしら？保健室に連れて行きましょうか？」

「大丈夫です、頑丈だけが取り柄なので、それよりもほのかさん!!怪我はありませんか!?押し倒してしまつて申し訳ありません!!」

「押し倒しつて、え、え、だ、大丈夫ですから、とりあえず頭をあげてくださいい!」

またこの人は大きな声で恥ずかしいことを言う!

「全く、相変わらずね。怪我がなくて何よりだわ。私も今後気をつけます、本当にごめんね」

「いえ、これは突然現れた自分が悪いんです!真由美さんが気にすることはありません!」

この人、生徒会長と知り合いなんだ…そういえば昨日、あのあと生徒会室に連れていかれていたっけ?

「ほのかさん、お手を。立てますか?」

「あ、ありがとうございます…」

なんかお姫様みたいな扱いだなあ…恥ずかしい…

「…会長もこうおっしゃられているのでとりあえず今日のことは不問とします!今後こう言ったことがないように」

「それじゃあね、達也くん、恭弥くん」

そう言うのと生徒会長と風紀委員長が去っていった…。

一科生のみんなも諦めて帰って行くみたい。私は、えっと、

「あの、私を助けようとしてくれてたんですよね?昨日は変な人に絡まれたつて、ちよつと困つてたんですけど、さつきはありがとうございます!」

「ほ、ほのかさん…。で、でも結局場をかき乱してしまつたり、迷惑を…」

…
こういうところは謙虚なんだなあ…

「ううん、本当に助かりました。ありがとうございます!」

「私からも、ありがとうございます」

雫…

「ほ、ほのかさんとお友達さん…」

「お、お友達さん…?」

この人私の名前は知ってるのに雫の名前は知らないんだ…そういえば私もこの人の名前知らない…

「彼女が恭弥の言っていたほのかさんか…」

司波さんのお兄さん!?私の名前、この人何を言っていたんだろ…恥ずかしいこと言われてなかったらいいんだけど…

「あ、あの、お兄さんもさつきはすみませんでした!」

「みんなを庇ってくれてありがとうございます」

「別に大したことじゃないよ。それに同じ一年だ、お兄さんはやめてくれ。普通に達也でいい」

達也さんって言うんだ…

「はい、達也さん!私は光井ほのかです、よろしくお願いします!」

「私は北山雫。よろしくね、達也さん」

「あの!僕も自己紹介してなかったのでもいいでしょうか
!!」

「え、あ、うん」

「僕は西郷恭弥と言います!!気軽にき、恭弥って呼んでください!!!雫さんどうぞ下の名前です!!なんならあだ名でもかまいませんよ!!!」

「あれれ、どうしたの恭弥くん?ほのかはあだ名呼びダメなの?」

「そ、そんなほのかさんがあだ名呼びなんて…そんなの恥ずかしくすぎる!!!」

「こいつは羞恥心の基準がわからん…」

あはは…恥ずかしい…

でもとりあえず、

「よろしくね、恭弥くん!」

「はううう…き、恭弥くん、恭弥くん…」

あれ?何かボソボソ言ってる…

「ほのかさん!!!大好きです!!!」

「へ…?」

間の抜けたような声が出てしまった。

というか！

「こんなところでそんなこと大声言わないで!!!!」

「へぶしっ!」

ああ恥ずかしい…それに人生初ビンタしてしまった…

みんな笑ってるし、もうもう!この人はなんでこんな簡単に好きとか結婚してくれとか言えるんだろう…

あれ?ビンタ?あ、

「ほのか、ビンタはダメ」

「ご、ごめんなさい!!!」

第2話 「僕の名前は森崎だ!!」

あのあと駅まで一緒に帰ることになった。やはりほのかさんは性格も素晴らしい人だった。一科生ということは魔法も優れているはずだ。顔も素晴らしく整っており性格もまるで天使のよう、そして魔法の腕もよくさらに胸も大きい!なんて素晴らしい人なんだほのかさんは、あああの人は女神か何かなのだろうか…

次の日の朝、僕は昨日のほのかさんのことを思い出しながら登校する。この登校中にほのかさんに会えたりしないかな…?早く会いたいな、ほのかさん…あ、もう学校だ。校門をくぐると達也の姿が見えた。レオたちもいるみたいだ。

「おーい!達也!たーつーやー!!」

大きく手を振りみんなのところまで行く。

「やあみんな、おはようー!」

みんなと挨拶をする。

「おーい、達也くくん、たーつーやーくくん!!」

するとだれかが達也を呼ぶ声が聞こえてきた。そういえば僕もみんないるのに呼びかけたのは達也だ。人気者だな、達也は。

「どうしたんですか、会長!?ていうか達也を下の名前呼び、え?」

「も、もしかして昨日のことですか!?!」

レオとエリカちゃんは何を身構えているのだろうか?

あ、もしかして…

「違うわよ、達也くんと深雪さんを生徒会室のラン「達也と真由美さんってそういう仲だったんですか!?!」…え、ち、違うわよ!?!」

「でも今レオが、それにみんないるのに達也の名前だけ読んでましたし!!隠さなくなっちゃっていいです!!そうなんでしょう!?!」

「だから違うってば!!なんであなたはそう短絡的な発想ばかりするのよ!!!」

「というか恭弥も達也の名前だけよんでたよな」

「そういえば、会長と恭弥くんの呼びかけ方、全く同じだったね」

「それはちよつと会長に失礼だよ、エリカちゃん」

「なんだって!!それはどういうことだい美月さん!」

「あ、いえ、なんでもありません!」

「あんたみたいなバカと同じにされるのは会長がかわいそうってことよ」

「なんでそんなこと言うんだエリカちゃん!!!人を見かけで判断するのはいけないんだよ!!!」

「いや言動で判断してるし…:というかなんで私だけちゃん付け…?」

あ、美月さんがエリカちゃんって言うからついっつられてしまった…まあ可愛いからいつか!!

「お兄様、会長とは一体どういうご関係で?」

「み、深雪、落ち着け、俺と会長は何でもない!」

「なんだって!!!つまりこれは真由美さんの一方通行ってことかい!」

「だからなんでそうなるの!?何にもないって言ってるでしょ!?!私はただ達也くんと深雪さんを生徒会室のランチに招待しようとしただけです!!」

「なんだって!!それはつまり深雪さんも守備範囲ということですか!?!」

「ふええ!?!会長、私そっちの趣味は…!」

「私だつてないわよ!?!というか深雪さんまで流されなないで!」

??これはこのあと再び達也と真由美とか関係に触れたことに刺激された深雪によって恭弥が凍らされるまで続きました??

「やっと校舎までたどり着いたな…!」

「校門から校舎までであんなに時間がかかるとは思わなかったわ…!」

なにやらみんな疲れている様子だがどうしたのだろ?何かあったのかな?真由美さんと出会ったくらいだったはずだけど…?

「それではお兄様、みんなまた後で」

「ああ、深雪、また後で」

「それじゃあまた後でね、みんな」

「え、ああ、それじゃあまた後でな、恭弥」

「うん、レオ。また教室で」

「「……………」」

「なんかナチュラルに深雪と同じ方向に行ったわね…」

「ああ、きつとほのかに会いに行くんだろう。ホームルームの前には戻ってくるはずだ、俺たちも行こう」

「ほんと大胆なやつだな…」

「おはよう!!ほのかさん!!!今日も相変わらずの可愛さですね!!!それと
雫さんもおはよう!!」

「おはよう、ほのか、雫」

「おはよう、深雪、恭弥くん」

「おはよう深雪、恭弥く…へ?な、なんで恭弥くんがいるの!?!ここA組
だよ!」

教室で雫と話していたら深雪とともに恭弥くんがやってきた。あまりにも自然に入ってきたので、一瞬恭弥くんも同じクラスなんだって錯覚してしまった。

「愛の前ではそんなもの関係ないんだよ!!会いたいからきた、それだけだよ!!!」

「なっ、だからそういうこと大きな声で言わないで!!」

またすぐこの人はそういうことを言う。言われるこっちの身にもなってほしい。恥ずかしいったらありやしない。

「なんでウィードがブルームの教室に来てるんだ!?!」

やっぱり、思った通りクラスの子が恭弥くんに噛み付いたみたい。また森下くんだ。昨日も達也さんたちに一番に突っかかって言った人だ。入学式の日も彼が騒ぎ立てたせいであんな騒動になってしまった。

「ほのかさんに会いにきたんだよ!」

「うるさい出て行け変人!!」

「なんでそんなこと言うんだ!?!」

確かに変わった人だとは私も思うけど、それはもうただの悪口だ。「君たちはいいいじゃないか、僕はクラスが違うからほのかさんと一緒に入れる時間は短いんだ!!朝教室に来るくらい別にいいじゃないか!!もしかしてほのかさんが僕と話すことに嫉妬しているのか、森重くん!?!」

あ、森重くんなんだ。て、やっぱり恭弥くんは言ってることがズレてると思う。なんでこの2人は噛み合っていないのにこんな口論を続けられるのかな?

「恭弥くん、言ってることがちよつとずれてると思う」

雫もそう思ってたんだ。それとやっぱり

「だからそんなこと大声で言わないで?!みんなそんなこと思っていないから!!それただ私が恥ずかしいだけだから!!」

「誰もそんなこと思っていない!!」

ほらあ!なんでこんな思いしなきゃいけないの…

「どちらかというと司波さんの方が可愛いし、それに僕の名前は森崎だ!!」

そんなのわかってるよ!そりゃ深雪なんかと比べられたら私なんてなんてことないけど…

「いいや、ほのかさんの方が可愛い!!!」

「ちよつとー!」

またそんな恥ずかしいこと言う!!そんなわけないじゃん!!

「深雪さんもたしかにいい線をいっているよ、まるで天使のようだ。だがしかし!!女神であるほのかさんにはだれも敵いはしないのだ!!!」

「もうやめて!!もうそれ以上私をはずかしめないで!!」

ああ、もう泣きそう

「なんだって!?!森崎くんめ!ほのかさんになんてことを!?!許さないぞ!!!」

「あなただよ恭弥くん!!!それと彼は森重くんだよ!」

「僕の名前は森崎だ!!!もういいからどうでもとつとと失せろ!!ウイー

ドのくせに!!」

あ、森崎くんだったんだ…

「…?冷たい…?」

え、ほんとだ、寒い…一体何が…

「ほのか、深雪が…」

「え、深雪…?」

「ウイード…お兄様…」

これは深雪が!?CADもなしでこんなこと!?ウイードという言葉に反応したんだ!達也さんも二科生だから…

「あ、予鈴だ。僕はそろそろ失礼するよ。ほのかさん、お昼にまたきますね!それではまた!」

「あ、うん、また…」

「ほんと荒らすだけ荒らしていったね」

「うん…」

ほんと嵐のような人だ…

そしてお昼時間、勢いよく教室の扉が開いた。

「ほのかさん!!一緒にお昼食べましょう!!」

やっぱり恭弥くんだった。あ、何か持つてる。お弁当なのかな?私お弁当ないから食堂なんだけど…

「恭弥くん、私食堂なんだけど大丈夫?」

「そのことなんだけどほのかさん!僕、お弁当をつく「また来たのか補欠ヤロー!!」…なんでいつも突っかかってくるんだ森…くん!!」

また森くんだ。懲りないなあ…それより何言おうとしたんだろ?お弁当って聞こえたけど…?

「お前が自分の立場もわきまえずにブルームの教室に來たりするからだろ!!そして僕の名前は森崎だ!!」

もう結構名乗ってるよね、そろそろ覚えてあげないとちよつとかわいそうだよ。

「好きな人に会いにくることの何が悪いって言うんだ!!!…はっ、もしかして僕のお弁当が狙いか!? たしかに僕も一人暮らしでお金に余裕がないから気持ちはわかるけれどこれはあげないよ!! これはほのかさんのために作ったんだ!!! あ、雫さんの分もあるよ」

「わ、私のためにお弁当!?!」

「え、私も…?」

すごい、恭弥くん料理できるんだ! 私は料理なんてあまりしないから、ちよつと尊敬する。それに雫の分もあるんだ…意外と気配りできるのかな? 言ってることはすごいズレてるけど

「お前の作った弁当なんて誰がいるか!! 僕は名門森崎家の人間だぞ!! お前みたいなの貧乏な一般人と一緒にするな!!」

「僕の家を馬鹿にするんじゃない!! それにいばっているけれどそれは森…キミがすごいんじゃないくてキミのご両親がすごいだけじゃないか!!」

「う、うるさい、それはつまり僕が生まれながらの勝ち組ということなんだ!! それに途中で言い直した、いい加減覚えろこの低脳な雑草頭が!! 僕の名前は森崎だ!!」

「ごめんよもっくん!! けれど見かけでそんな判断をするのはいけないんだぞ!! こうみえて僕は入試のペーパーテストの順位は11位なんだぞ!!」

うん微妙。意外と高いけど。というかもっくんて、覚えられないからついにあだ名つけちゃったよ…

「だれがもっくんだ!! 変なあだ名をつけるんじゃない!! というか微妙じゃないか、なんだその成績!! 僕の方が断然上…あれ、下?…う、うるさい!! そんな微妙な成績で威張るんじゃない!! それにこの学校で重要なのは実技なんだ!! 僕は入試の実技3位なんだぞ!!」

あ、負けてるんだ…

?? 結局これは教室の出入り口を恭弥が塞いでいたためなかなか達也の元へ行けない深雪がしびれを切らして2人を凍らせてしまうまで続きました(結構いろんな人も巻き添いをくらひ凍りました)??

あのあと私は雫と恭弥くんと共に食堂に来ていた。恭弥くんが私たちも分のお弁当を作ってきてくれたようなので別に食堂にこなくとも良かったのだがあの様子では教室で食事はできないからだ。

「どうぞほのかさん！雫さんも！」

「あ、ありがとう…」

私たちは恭弥くんからお弁当を受け取る。最初は遠慮したんだけどまた騒ぎ出したから仕方なく受け取ることにした。

「どうぞ食べてみてください！今日はほのかさんのために頑張って作ったから自信作なんです！」

「うわあ、美味しそう…」

受け取ったお弁当は女性サイズの大ききで半分には白いご飯、そしてもう半分色とりどりのおかず、焦げた唐揚げ…あれ？

「ねえほのか、この唐揚げ、焦げてるよね…」

「う、うん…他のは美味しそうなんだけど…」

料理はできるけどそんなに上手なわけじゃないのかな…？

「見た目は黒いけどその唐揚げは美味しいんだよ！僕も始めてママンが作ってくれた時は驚いたけど味はすごくよかつたんだ！」

「そ、そうなんだ…」

ま、ママン？お母さんのことなのかな？

「さあ、食べてみてください！！」

「い、いただきます…」

おそるおそる私は食べてみることにした。雫は私が食べるのを待ってるみたい。私に毒味させるつもりなんだ…。

「お、美味しい…」

「本当かい!?よかつた！頑張った甲斐があつたよ!!」

普通に美味しい。他のおかずも口に運んでみるけれどどれも美味しい。雫も私の感想を聞いて黒い唐揚げを口に運ぶ。

「ほんとだ、美味しい。」

「雫さんにもそう言ってもらえてなによりだよ！本当はもつと豪勢なものにしようと思つただけどいきなりそんなもの持つて行ったら

ひかれると思って一番自信のある料理にしたんだ！」

そんなこと気にしなくてももうひいてるけどね…

「そんなことしなくてもすでにひいてるよ」

あ、雫が言っちゃった…

「よかつたらほのかさんの好きな料理を教えてくださいませんか？明日作ってくるよ！」

「あ、うん、ありがとう…」

明日も作ってくるんだ…

結局これ以来ずっと恭弥くんは私と雫のお弁当を作ってきてくれました。

そして放課後

「これで僕が勝ったら、もう金輪際僕とほのかさんの仲を邪魔しないでらおうか、もっくん!!!」

「お前みたいな補欠にこの僕が負けるなんてあり得ないけどな!!そして変なあだ名で呼ぶんじゃない!僕の名前は森崎だ!!」

第三演習室で恭弥くんと森山くんが模擬戦をしていた。その場には2人以外に私と雫、生徒会メンバーに風化委員長、深雪、そして達也さんもいる。

「なんでこんなことになったんだろう…」

??数十分前

放課後になり深雪は生徒会に選ばれたため生徒会室に行き、私は雫と帰ろうとしていた。そこにまた恭弥くんがやってきた。

「やあほのかさん!僕も一緒に帰ってもいいかな!」

「うん、雫も大丈夫だよな?」

「問題な「いいわけないだろ!!ウィードがブルームと一緒に帰れるわけないだろ!?!立場をわきまえろ!!」…」

雫の言葉を遮りまた森内くんが騒ぎ出した。流石にもういいだろ

うと他のクラスメイトもちよつと呆れ気味だ。

「森園、もうこいつに関わるのはやめとけ、あいつは頭がおかしいんだ、めんどくさいだけだぞ」

「うるさい、お前たちに一科生としてのプライドはないのか!?そして僕の名前は森崎だ!!お前まで間違えるんじゃない!!中学も一緒だっただろう!!」

そして2人を朝と昼に続いて2人を止めていた(凍らせていた)深雪もいないためか2人の言い合いは止まらず段々と激しくなつていき、しまいには風紀委員がとめにくる始末に。そして

「こうなったら模擬戦だ!!ウィードとブルームの違いを思い知らしてやる!!!」

「うけてたとう!!それでキミが僕とほのかさんの邪魔をしないと云うならば!!!」

「はあ…:わかった、生徒会の方には俺が伝える。双方準備が出来次第第三演習室にこい」

なんでこんなことになつたんだろう…。それに森脇くんは一科生で教職員推薦枠で風紀委員になるって聞いている。その森川くんは二科生の恭弥くんが敵うのだろうか

「恭弥くん、そんなこと言つて大丈夫なの!?森永くんはあれでも一科生なんだよ!?!」

「心配しなくても大丈夫だよ!!僕があのお邪魔虫を追い払つてあげるからね!!そしたら2人の仲を邪魔する相手はいなくなるよ!」

「誰もそう言うことを心配してるんじゃないよ!」

心配だ…:この人はなんでこんなにもズレてるのだろうか…

そして今に至る。

そこでは服部副会長と達也さんが模擬戦を行なつていたみたいで生徒会のみなさんに風紀委員長、それに深雪と達也さんがいた。すでに勝敗はついてたようで達也さんが勝利したみたいだ。

さすが達也さん、私も達也さんの模擬戦見たかったなあ…:いいなあ深雪は見る事ができて…

「風紀委員になる森崎の実力を知る良い機会だし模擬戦は許可したが、一体何があつたんだ？」

「恭弥さんと森谷くんがほのかを取り合っていてこうなりました」

「ちよつ、雫!? 変な言い方しないで！ 達也さんもいるんだから！」

「あ、ああ、そう言うことか…」

ああ、達也さんが苦笑いを浮かべてる！ うう…

「達也くんはどつちが勝つと思う？」

「2人の実力をはつきりと確認したことがないのでわかりませんが、森崎一門のクイックドロウは強力ですし、実戦経験もある森崎が優勢でしょう。しかし昨日の恭弥のあの加速の速さは異常でした。実際に見てみない限りはわからないでしょう」

達也さん、なんか生徒会長と仲良さげだなあ… 深雪という大きな障害もあるのに、敵は多そうだ…

「僕が勝てばもう僕とほのかさんの邪魔をしないと誓ってくれるかい、もっくん!!!」

「いいだろう、お前が勝つなんて方に1つもないだろうがな!! 逆に僕が勝つたらもう2度とブルームに関わらないでもらおうか! そして変なあだ名で呼ぶんじゃない! 僕の名前は森崎だ!!」

また微妙にズレてる…

「両者準備はできているな。それでは始め！」

模擬戦が始まった。森崎くんがCADを素早く起動させる。

早い！ 昨日は距離が近かったから千葉さんに弾かれたけど今度はもう少し離れている。昨日もこの距離なら森崎くんの方が早かったかもしれない。

「加速」
アクセル

恭弥くんはそう呟いたかと思うと一瞬でその場からいなくなった。

そして

「ぐはあ!?!」

頭から森重くんのこ、こか… 股に頭から突っ込んでいた…

森下くんは股を抑えてそのまま倒れてしまった。

「いてて、こけちやった…」

「し、勝者、西郷恭弥…」
そう言いながら恭弥くんは立ち上がった。

第3話 「ぼくのなまえはもりさきだ…」

「い、一体何が起こったんだ…?」

「わからない…何も見えなかった…」

「お兄様は一体何が起こったのかわかりましたか?」

「自己加速術式を使いそのまま森崎に向かっていき途中で足が絡まってこけてそのまま森崎に突撃したようだ。俺もなんとか目で追えた程度だな」

「それだけであんな速さになるの!」

「ぼ、僕は加速の速度を自由に変えられるんです、いてて…」

ま、まさかこけてしまうなんて…ほのかさんを意識しすぎて張り切りすぎててしまった…

「どう言うことだ?」

「僕は加速に特化した人間なんです!最大速度は音速を超える速さなんです!!すごいでしょ、ほのかさん!!」

「う、うん、すごいね…」

「まあ時速700キロを超えると曲がれないし止まらないしそのまま壁にぶつかるまで走り続けてしまうんですけどね!ちなみにさつきは時速600キロだよ!!」

一度音速にした時はご近所さんの家突き抜けて行って僕も大怪我したんだけどね!

「だがそこまで早いと息もできないし肉体がもたないんじゃないか?」

「大丈夫だよ!僕だってそんなバカじゃないんだ、ちゃん硬化魔法で肉体を硬化してるからね!」

達也までも僕を見た目でそんな判断してたんだね!みんな揃って失礼な!

「「え!?!」」

「肉体に硬化魔法をかけると窒息して死ぬぞ」

「なんだって!!!じゃあ僕は死んでしまうのかい!?!」

大変だ!!!僕は死んでしまうのか!!!そ、そんな…まだほのかさんと

て、手を繋いだことすらないのに!!!

「どうしようほのかさん!!!僕死んでしまっただって!!!」

「え、あ、うん」

なんだったって!!!

「うん!?ほのかさんは僕が死んでしまってもいいって言うのかい!？」

「え、別にそう言う訳じゃないよ!？」

「じゃあどう言うことだい!？」

「少し落ち着け、恭弥」

「とめないでたつくん！僕はもうすぐ窒息して死んでしまうのだろう!?なら最後のひと時はほのかさんといいたいんだ!!」

「死なないから安心しろ。そしてたつくん言うな」

「なんだったって!!!じゃあどう言うことなんだ!!!」

「普通は肉体に硬化魔法をかけると窒息してしまうのだがお前は肉体に硬化魔法をかけても何も別状はないのだろう。だからそんな心配はいらない」

なるほど、そう言うことか…

「じゃあ僕はなんで死んでいないんだい!？」

「わからないからみんな驚いてるんだ。一度肉体に硬化魔法を使ってもらってもいいか?」

「わかったよ!」

僕は腕につけているCADを操作する。

「…!?これは…恭弥、それは硬化魔法ではないぞ」

「なんだったって!!!じゃあこれは一体なんなんだい!？」

「サイオンでできた薄い壁が全身を覆い尽くしている。どうやら体からサイオンを放出して表面に張り付くような形で止めているようだ。単純な放出と収束を合わせた魔法見たいだな。さしずめサイオンの鎧といったところか。そして今CADで硬化魔法を起動したみたいだが使えてないみたいだぞ」

「ほんとだ、よく見るとサイオンをまとってるみたい」

「よく今まで気づかれなかったな…」

「なんだったって!!!それじゃあ僕はCADなしでそんなことをしていたっ

て言うのかい!? CADに入れてる魔法はこれしかないのにCADを持つている意味がないじゃないかい!!」

「他の魔法はどうした?それに加速魔法は?」

「加速魔法はCADを使わなくても普通に使えるんだよ!ただ単に速くなるだけだからね!それと他の魔法は何一つ使えないんだよ!!」

「な、なんか性格もそうだけど魔法もはやめちゃだね…」

「そもそも加速魔法の使い道は自己加速だけじゃない。その程度の知識でなんで200人のなかで11位を取れたのが不思議」

「なんだって!!それは僕が嘘をついていると言っているのかい雫さん!?僕はちゃんと真由美さんから教えてもらったんだ!ね、真由美さん?」

「え、ええそうね。彼、なかなか優秀な成績なのに間違っていた問題が全て理解不能な答えみたいで教師の間で話題になっていたのよ」

「なんだって!!それは「大変です会長!!森崎の股間から酷い出血が!!」そして肩をあげて口をすぼめ、半目の状態で僕の名前は森崎だと小さく連呼しながら気絶しています!!」：なんだって!!もつくんは大丈夫なんですかはんぞーくん!!」

「ぼくのなまえはもりさきだ…」

「そんな、僕がこけなければ彼はなんともなかったのに：もしお○○○が潰れてしまったらどうしよう!?!もつくんじゃなくてもっさんになってしまいうじゃないか!?!」

「西郷：俺をはんぞーくんと呼んでいいのは会長だけだ!!」

「今はそんなことどうでもいいです服部副会長」

「副会長、少し見せてもらっても構いませんか?」

「司波、なんとかできるのか?」

「サイオンの鎧を纏ってあの速さです、もし完全に潰れてしまっていてはどうすることもできませんがまだ無事なら早く手当をしないとイケません」

「僕の名前は森崎だって、本当の名前は森宮なのに：全く関係ないところなのに頭もおかしくなっちゃったなんて、ちよつとかわいそう…」

「ほのか、それだと彼はいつも頭のおかしな人になってしまおうよ…」
「え、どういうこと、深雪？」

「ほのかも名前を覚えていなかったんだね、結構名乗ってるのに…」
「大丈夫です、ぶつはついてるみたいです」

「よかった!!これでもつくくんはもっさんにならなくて済むんだね!!」
「もっさん？」

「よくわからないが血が出ているのはあそこより少し上の部分だ。直撃はしなかったんだろう。ただこのまま放つて置くのも危ない。すぐに保健室へ連れて行きましょう。先に応急処置をするのでズボン脱がします、女性の皆さんは後ろを向いておいてください」

??だいが騒いでますが保健室でなんとかなる程度の怪我なので大した怪我ではありません??

そしてあのあと、深雪と達也への説明も終わり、2人が帰宅したあとの生徒会室では

「今年の一年は面白そうなやつが多いみたいだな」

「そうね、達也くんなんかはんぞーくん倒しちやったし」

「西郷恭弥だったか、あいつの魔法もなかなか面白いじゃないか。C A D無用の音速まで上がる加速魔法にサイオンの鎧」

「魔法はすごいけど性格がね、悪い子じゃないのはわかるけどちよつと考えが短絡的すぎるしあのはちやめちやな言動がね…」

「あんなやつに好かれて、光井も大変だな…。その光井も達也くんにぞっこんみたいだけどな」

「いつそのこと、彼も風紀委員にでもしますか？一応さっきの模擬戦では教職員枠の森宮くんを倒していますし」

「冗談でもやめてよ、りんちゃん。そんなことしたら風紀委員会が潰れちゃうよ」

「いや、案外面白いかもしれないぞ」

「そうになったら彼の面倒を見るのは摩利よ」

「それは遠慮しておくよ」

「そういえば森宮くんは大丈夫だったのかしら。あのあとずっと目を覚まさなかったけれど…」

「保険医の先生もいましたし大丈夫でしょう。今は服部くんが確認しにいつてくれてますので報告を待ちましょう」

「女の子になって目覚めていたりしてな」

「女の子がそう言ったことを言うもんじゃありませんよ、渡辺さん。それにちゃんといっているのを司波くんが確認してくれたではありませんか」

「うんお前の方がよっぽど危ういぞ…にしてもあいつ、単純な加速と放出と収束しか使えずよくこの学校に入学できたな」

「ほんとよね〜」

「そういえば彼が音速を超えても無事な理由、身体の問題は解決しましたが呼吸の問題は解決しませんでしたね」

「あ、忘れてた…」

「ぼくのなまえはもりさきだ…」

「まだ同じことを繰り返してるわね、森宮くん…」

「本当の名前も違うようですし、やはり光井の言っていたようにどこか頭がおかしくなってしまうのでは、先生？」

「ぼくのなまえはもりさきだ…」

あれから1週間たち、森島くんも元気に登校しています。あの時のシヨックからか、先週はずつと女子の制服を着てあたかも自分が女の子であるかのように振舞っていたけれど、今日は男子の制服を着て、ちやんと男の子に戻ったようです。あれ以来2人の口論も一切起きなかったのですが、放課後になり、

「もっさんがもっくんに戻ってる!!!もう大丈夫なのかい!?!」

「そういうえば今朝はほのかから会いに行ったからまだこのこと知らないんだね」

「そうだよ、雫さん!!僕すつごく嬉しかったんだよほのかさん!!!ほのかさんもちよつとは僕に興味が出てきたのかな!?毎日頑張った甲斐があつたよ!!!」

「え、あ、うん」

「あれは達也さんに会う口実になるからほのかは行ったんだよ。同じクラスだから」

「ちよ、雫!?!」

私はいつも私のクラスに来てて他の子の迷惑になるから私から会いに行っただけでいつも恭弥さんが1人で来てくれて深雪もいるんだから達也さんも来たらしいのになって思ってたけどちよとも来てくれないしお昼は生徒会室で食べてるみたいだしあまり会う機会がないからこれを建前にしてE組の教室に行ったら合法的に達也さんに会えるなんてこと考えてないんだからね!!!

「うるさいわね、僕に近づくんじやない!!あなたのせいで酷い目にあつたんだからな!!家族からはおかしな目で見られるし、今朝はクラスのみんなから生暖かい目で教室に迎え入れられたんだぞ!!お小遣いは全て化粧品に消えているし、私服も男性用を全て捨てて女性用に買い直してしまったせいだ休日僕は女性用の服で出かける羽目になつてものすごく大変だったのよ!!!」

ところどころ口調が戻ってないみたいだね…。というかあのメイク、化粧品を揃えるところから全部自分でやってたんだ…

「それはごめんよもっくん!!!けれど休日に出したときに女装してるもっくんを見つけたけどすごい挙動不審だったから何か怪しいこと

でもあるのかと思ってこっさり写真を撮りながらあとをつけたんだけど何か買ってなんだったんだろうと思っただらそう言うことだったんだね!!あ、みんなその写真欲しかったら送るよ」

それって怪しがつてるんじゃないやなくて面白がつてるんじゃないや…

「あとをつけるんじゃない写真を撮るんじゃないそして送るんじゃない!!!てかみんなって誰よ!!僕の女装した写真なんて欲しがる人いるのかよ!!!そして僕の名前は森崎だ!!!」

「恭弥、後でその写真送ってね。何かあった時森崎くんを脅す材料にするから」

「わかったよしーちゃん!」

「絶対送るんじゃないぞ西郷!!!北山はなんでそんなひどいところしようとするんだ!!!」

あ、森浜くん恭弥くんにちよつと影響されてる…うん?あれ?恭弥?しーちゃん?

「別に大したことじゃない。恭弥とほのかの邪魔をした時にちよつと使うだけ」

ほ、ほら今!!恭弥って言った!!前までは恭弥くんって言ったのに!!

「し、しーちゃん…そんなに僕たちのことを…」

恭弥くんも!!!しーちゃんって!!!急にどうしたの!?!何があったの!?!

「おい森崎、いつになったら風紀委員会室に来るんだ?委員長が怒っているぞ」

「司波!?!」

あ、達也さん!!!

「ほのか、露骨に嬉しそうな顔しないの」

「え、そんなことないよ?そ、それより2人の呼び方!私の知らない間に何かあったの?」

「別に大したことはないけど、嫉妬?」

「そんなんじゃないよ!ただ雫があんなあだ名呼び許すなんて珍しいなって思ったから…」

「安心して、何も無いよ。ただほのかのことを色々教えてるうちに仲

良くなったただけだよ。あだ名呼びもほのかが嫉妬したらいいねってことでそうしただけ。そしたらこの反応だから、わざわざ呼び方を変えた甲斐があったみたいだね」

「べ、別に嫉妬なんてしてないよ！というか色々教えてるって、変なこととか言わないでよね」

「大丈夫だよ。ただ高校以前のこと教えたりしてるだけだから」
本当に変なこと言っていないかな…

「べ、別にお前に言われたから行くわけじゃないんだからな！」

「そんなことはわかってる。いいからさっさとしろ」

あ、達也さん…行っちゃった…

「それではほのかさん、一緒に帰りましょう!!」

「そうだね、今日から部活勧誘週間でなかなか帰れないらしいし、早く行こっか」

「はい!!」

第4話 「雫はいつまで写真撮ってるのよ!？」

新入生勧誘週間は思ってた以上にすごかった。外へ出ると既に様々な部活が勧誘を始めていて私と雫はすぐさま波のように押し寄せてくる勧誘に捕まってしまった。おそらく一科生である人たちを戦力として狙っているのだろう、二科生である恭弥くんはその人たちに跳ね除けられそこにはいないかのように踏みつけられている。

とりあえず、結論をいいます。私たち、拉致られました。

「だ、だれか助けて〜!!」

「先輩方、そこをどいてください!!」

人混みの中から恭弥くんの声が聞こえてくる。踏みつけられているのが見えていたし、大丈夫なのかな？

「下です下!!今あなたのその左あしが僕の大事なところの5.3ミリ上を踏んづけています!!そしてうぶそうな顔して黒なんです!!見えちゃいました、ごめんなさい!!!」

「きゃー!!!」

「ふべしっ!」

恭弥くんが蹴り飛ばされて人混みから出てきたみたい。もう、踏んづけられたからって女性の下着見るなんて最低だよ。そんな人は蹴られて当然なんだよ、もう!

でも今はそれよりも、

「き、恭弥くん、助けて〜!」

「ほ、ほのかさん!?!なんだってそんな学校で連れ去られているんだい!?!」

そんなこと私にだってわかんないよお…

「あれ、多分バイアスロン部のOGだよ。彼女たち、成績優秀者だから入部させようとして強引に連れてつちやっただと思おうよ」

「なんだって!!それは大変だ!!でも流石ほのかさん、拉致してまで入部させたがらせるなんて!!でも残念だけどそんな無理やりする人にほのかさんは渡さないよ!!!教えてくれた黒いパンツの人ありがとうございます!今行くよ、ほのかさん!!!」

「こんなところで黒いパンツ言うな!!!」

「へびらっ!」

あ、またなんか蹴られてる…。あれ、クラウチングスタート?

「ほのかさんに怪我はさせられないんだ、速度調整を誤ったらほのかさんが怪我をしてしまう。そんなことは絶対にできない。あの速さだと時速200キロでいける。よーい、加速」

すごい速さで恭弥くんが追ってきてくれる。そういえばこの前も私を助けようとして加速を使ってきてくれたんだっけ…

「な、なんだあいつ、ものすごいスピードで追ってくるぞ!」

「あの速さだとすぐ追いつかれる。私たちもスピードを上げるぞ、振り落とされないように気をつけろよ!」

へ?

「ひあああああ!!!」

なんなのこの人たち…

「あいつめちやくちや速いな…こうなったら魔法で、」

風の魔法!?あ、危ない、恭弥くんに直撃する!?

「ぐはあ!!!」

「恭弥くん!」

「恭弥!」

ち、直撃した!?そ、そうだった、恭弥くんは加速とあのサイオンの鎧以外は全くもって使えないんだった

「あ、あいつ何もせず直撃しやがったぞ…大丈夫なのか?」

「威力は抑えていただろ?問題ない、それより行くぞ」

も、問題ないってこの人たち、魔法を人にぶつけたんだよ!?それなに問題ないって!

「なんのこれしき!!うおおおおお!!加速!!!」

よかった、なんともないみたい!サイオンの鎧はサイオンの密度を高めて硬化の役割を果たしてくれるって達也さんが言ってたもんね
「おい、あいつさつきよりスピード上がってないか?これなら一瞬で捕まるぞ」

「ならこれでどうだ!」

恭弥くんには壁ができるように地面がずれ上がって行くあのまま
じゃ壁に激突してしまう！

「この程度、ぶち破ればいいだけだ!!倍速、400キロ!!高速ボマイエ
!!!」

ひ、膝蹴りでぶち破ってきた!?

「何!?普通かわすだろ!!」

「なんてはちやめちやなやつなんだ…」

と、という、

「止めて止めて下ろしてーっ!!もう無理無理無理無理ーっ!!早く助け
て恭弥くん!!!」

「ほ、ほのかさん!?こ、こうなったら急ブレーキ、からのジャンプ!!!」

え、校舎の壁へ足を置いて、一体何をするつもりなの?

「なんだよあのジャンプ力、もうほぼ真横だぞ!?!」

「これなら曲がらない心配もいらぬ、地面を砕いて止める!!行くぞ、
さらに倍速800キロ!!必殺、超速ハイフライフロー!!!」

「ぼ、ボディープレスだとうわーっ!!」

「き、きやーっ!?!」

ものすごい速さで目の前を通り過ぎで地面に激突した。衝撃で私
たちを連れ去った先輩たちも弾き飛ばされ私も落とされる。あ、あれ
?浮いてる?

「大丈夫かい、ほのかさん!?しーちゃんも!!」

「私は大丈夫。助けてくれてありがとう」

「わ、私も大丈夫、助けてくれてありがとう、と、え?ええーっ!?!」

こ、これっってお姫様抱っこ!?!

「お、下ろして!早く下ろして!!」

「ほ、ほのかさん暴れないで!い、痛い痛い、てあれ?これっで噂に聞
くお姫様抱っこというやつではないのかい!?!なんと言うことだ、僕は
ほのかさんをお姫様抱っこ…は、恥ずかしいっ!!!」

「わ、私も恥ずかしいよ!!だから下ろして、早く下ろして!!」

「お、下ろす、下ろすからちよつと叩かないで下さいほのかさん!!」

やだもーっ、恥ずかしすぎる!!!

「恭弥、ほのか、今そこに下ろすのは危ない。恭弥が地面を破壊したせいで足場がかなり悪い」

「え、ほんとだ…て、そんなこと言いながら写真撮らないでよ!!というか隼はなんで無事なの!？」

「その子が一瞬で足場のいいところに運んでくれたよ」

「そそ、だから私たちもこの子もなんともないの」

「大好きなほのかを一番に優先したいのにほのかより危なかった私と先輩たちを先に助けてくれたのは恭弥のいいところ。それに一瞬だけドサイオンの鎧を経験できた」

そ、そうだったんだ…。ちゃんと周りを見てるんだね…。

「というか隼はいつまで写真撮ってるの!？」

「し、しーちゃん!そ、その写真、あとで送ってくれないかい…?」

「いいよ。ベストショット送ってあげる」

「ち、ちよつと隼!？」

「で、でもしーちゃん、はじめてのツーショットでお姫様だっこは流石にダメではないだろうか!？はじめてはもつとその、2人きりの写真が欲しくてもどうしてもその機会がなくてなんとか勇気をだして写真を取ろうと試してもなかなかとれず、やつとの思いで撮れた初々しい感じの微妙な距離感ある写真が理想なのだがどうだろうか!!」

長!?!そんなこと考えてたの!?!ちよつと意外…:というかツーショットってそんなにこだわったりするものだったけ？

「大丈夫、その理想はたった今砕け散った」

そんな殺生な!?!

「なんだって!!じゃあ僕は初めては初々しい感じのある微妙な距離感で、2回目は少し仲の深まったけれどやっぱり2人きりは恥ずかしくて距離は近まったのにお互いそっぽを向いていて側から見れば早くくつつけばいいのにあの2人という感じの写真、そして3枚目はイベントごとで2人が手を取り合って必死にがんばって掴んだ勝利に満面の笑みを浮かべながらもう肩も触れ合うほどの距離で撮った写真、そして4枚目はもう2人きりで撮る写真もなれてきて2人で遊ぶこともだんだんと多くなつて遊んだ記念なんていつて軽い感じでも

実はもつと2人きりの写真が欲しくて撮った写真も撮れないって言うのかい!？」

うんだから長い!!たかがツーショットだよ!?いや恥ずかしいけど!!決して文字数稼ぎじゃないんだよね!?もうそんなんじゃないよ!!ピュアなんだかそうじゃないのかよくわかんないよ!!

「そうだね、今でもう98枚目」

そして雫は撮りすぎだよ!!今言った幻想全部ぶち壊しちゃったじゃんか!!

「なんだって!!そしたら次は99枚目じゃないかい!?99枚目はもう2人で撮った写真もこれを撮れば次で100枚だねなんていいながらおうちでイチャイチャしながら密着して撮る写真だから残しておいてね!!!」

どれだけツーショットにこだわっているのこの人!?!いくらなんでも99枚目に撮るツーショットまで妄想してる人なんていないよ!!

「ごめん今109枚目」

「なああああんだって!？」

「いやだから撮りすぎだよ!?そんなお姫様だつこの写真ばかり撮ってもいらなでしょ!?てお姫様だつこ!!!」

恭弥くんがわけわからない妄想語り出すから忘れてた!

「ほのか忘れてたの?」

「き、恭弥くん早く下ろして!」

「ご、ごめんよほのかさん!!すぐ安全な地面に行くから...あ!!」

か、顔が近い!!あ、あれ、近くで見ると恭弥くんって結構美形だ: 達也さんに負けてないかも:というか恥ずかしい!!!

「一体なんの騒ぎだ!？」

風紀委員長の渡辺先輩だ!この騒ぎを聞いて駆けつけてきたんだ!

「な、なんだこれは:なぜ地面がこんなことになっている?それにお前たちは卒業生の萬谷と風祭じゃないか!?!お前たち、一体何をした!?!」

「いや、私たちはただ有望な新入生とさらっただけなんだけどこの子

が…」

「さらった!? その子たちはいった、い…!? お前たち何をしている!? こんな学内で堂々とお、お姫様抱っこなど!! 不純にもほどがあるぞ!!」
「ご、ごめんなさい!!」

「しかし摩利姫さん!! 僕はどうしたらいいのでしょうか!」
「何がだ!? いいから早く下ろせ!! というか姐さんやめろ!!」

…
まだ何かあったのかな恭弥くん。意外と妄想癖があるみたいだし

…
というか姐さん呼びなんだ。これは初めてのパターンだ。

「お前、新入生にまで姐さん呼びさせてるのか…?」
「流石にひくわ…」

「私が呼ばせたわけじゃない!! あいつらもこいつも勝手にそう呼んでるだけだ!! それで何がどうしたんだ恭弥!」

「僕は手をつなぐ前にお姫様抱っこをしてしまったんです!!」

あ、やっぱりまた妄想が始まるんだ…

「あ、ああ…だからどうした?」

「どうしたですって!? 大事なことじゃないですか!? 姐さんは彼氏さんとは先にお姫様抱っこをして手をつないだとも言うんですか!」

「べ、別にしゆうとはそんなこと!!…し、してなくもないが…」

渡辺先輩つて彼氏いたんだ…ちよつと意外な感じ

「やっぱりその順番だったんですね!!」

順番までは言っただけが多分したんだろうなあ…き、キスとかもきつと…私もいずれ達也さんと…

「一緒に帰るようになって手作りのお弁当を食べてもらうようになって…なのに手をつなぐ前にお姫様抱っこをしてしまった!! 柔らかくすべすべなほのかさんの柔肌に直接触れてしまつて髪からはいい匂いが漂ってくるし顔の距離もすごく近くてお姫様だつことはものすごくくすばらなものとわかりましたがものごとには順序というものがあるんです!! 僕はどうしたらいいんでしょう姐さん!!」

「だからそう言うこと言わないでつて言ってるでしょ!! ものすごく恥ずかしいんだから!! それにこんなことには順序なんてないよただの

妄想だよ!!!」

「ほのか、その状態の方がよっぽど恥ずかしい」

「雫はいつまで写真撮ってるのよ!?」

「今で252枚」

「ち、ちよつと待て、手作りのお弁当だと!?み、光井、お前は昨日見た限りだと達也くんに惚れていたのではなかったか?まさか2人は付き合っていたのか!?」

「え、な、なんで渡辺先輩がそのことを知ってるんですか!?」

「というかここでそんなこと言っちゃったら…」

「な、な、な、なんだってえええ!!!まさかとは思っていたけれども本当にほのかさんがたっくんのことを好きだったなんて!?そ、そんな…そんなの嘘だー!!!うわあああん!!!」

「き、気づかれてたの!?て、ちよつと、き、きやつ!」

「すごい状況だね」

「雫は写真撮るのをやめて助けてよ!?」

「大丈夫。ちゃんと動画も撮ってある」

「何が大丈夫なの!?」

今恭弥くんは私をお姫様抱っこした状態でしやがみこんで泣き喚いでいる。そりゃ好きな人にふられたようなものだから泣いてしまいう気持ちはわかる。ふつたの私だけど。

「ち、違ったのか…そ、それはすまなかった…」

渡辺先輩がすごく申し訳そうな顔をしている。

「泣かないで恭弥。大丈夫、安心して」

し、雫…

「ほのかは確かに達也さんにぞっこんラブで」

ぞ、ぞっこんラブって言いかた!!

「達也さんがいればすぐ目でおって愛おしそうな顔で見つめてるけど」

べ、別にそんな見てないよ!?ほんとだよ!?

「けれど毎日お弁当を作ってきてくれたら朝から会いに来てくれるつも毎日好きだって言ってくる恭弥のこともちろんと響いてきてる

よ」

……

「今朝もね、会いに言った理由は建前でほのかは達也さんに会いたくて言ったんだけど」

「こ、ここでそれ言っちゃいます雫さん!？」

「でもそれだけが理由じゃないよ。いつもはすぐに来るのに私が一回少し引いてみるって言ったから今朝はなかなか教室に来なかったでしょ? ほのか、はじめは恭弥がなかなかこないから少し不安になってE組の様子を見に行こうとしてたんだよ? 結局私がそそのかしたら達也さんに食いついちゃったけど」

「ほ、ほのかさん……」

……

「なあ風祭、こいつら入学してまだ1週間くらいだよな? なんでこんな濃いラブコメしてるんだ……?」

「私に聞かれてもな……なんかもう何ヶ月も学園ラブコメやってる奴らみたいだぞ……」

「お前たちは後で風紀委員会室まできてもらうからな」

「げっ!」

「それに達也さんには深雪というものすごく高い壁が存在するんだよ? だから時間はまだまだあるんだからほんとに好きならこれからもアタックし続けたらいい。まだ始まったばかり」

「し、雫さん……そうだよね、まだまだ始まったばかりなんだからこんなすぐにへこたれてたらダメだよね!!!!」**ありがとう雫さん!!! ほのかさん、僕は全然諦めてないよ!! たつくんから僕が奪い取ってあげる!!!**

「別に付き合ってるわけじゃないけどね。私はバイアスロン部に少し興味があったから見学してくるね。ほのかが入らないなら入ることはないけどほのかは今日はもう休んで」

「う、うん……ありがとう、雫」

それにしても雫はいつまで写真を撮ってるんだろう……

「帰り道、1人じゃ危ないからちゃんと恭弥が送って行ってあげるんだよ。それじゃあ、また明日、2人ともばいばい」

「う、うんまた明日…」

…あ、あれ？2人？

「え、ええーっ、2人きり!？」

「ふ、2人きり…ぷ、ぷしゅ…」

「え、ちよ、恭弥くん!?!恭弥くんしっかりして!?!き、きゃー!?!」

第5話 「うんた行で区切るのやめよ?」

「ほ、ほ、ほのきやしゅんはききききゆうじ、ちゅのといはいつもなにをし、ているんでふか!?!」

「ご、ごめんかみかみだし区切るところおかしいしで何言ってるかよかわかんない…」

雫はバイアスロン部の見学へ行つてしまい、今は恭弥さんと2人つきりだ。入学してから中々濃い一週間を過ごしてきたけれど恭弥さんと2人きりという状況は初めてだ。私も初めは少し恥ずかしく緊張していたのだけれどご覧の通り恭弥くんが異様にテンパっているため私は逆に落ち着いている。

「そ、それはごめんなさい別にた!いした!ことを聞こうと!した!わけじゃないんですた!だちよつと!ちよびつと!だけ恥ずかしくて!つ!い先週の水曜日のお昼の12時50分頃に聞いた!質問と同じ質問をしてしまった!だけで別に前に話して!いた!だった!ことを忘れて!しまった!訳ではありませんきちんと覚えています安心して!ください!!!」

「うんた行で区切るのやめよ!?!」

今ちよつともものすごいこと聞こえたきましたけれど何言ってるか全然わかんない。それでもた行で区切っていることに気づいた私を褒めて欲しい。これでも一週間一緒にいたんだもの、森鎌くんほどじゃないけれど西言もある程度理解できるようになったはずである!

「ご、ご、ご、ご、ごめんなさい!!いそ!!んな別に別にそ!!んなつもりちやうかつたんやけ!!どほんまごめんなさい!!別にほのかさ!!ん困らせたいわけ!!やないねんなほんまにあとせ!!ほんとにちゃんと休日の日に何し!!てるか覚えてるからねせ!!んせ!!んしゅうの日曜日なんかにゆうがくし!!きの前の日でお昼す!!ぎからし!!ーちゃんと電話でお話し!!してて気づいたら夜おそ!!くになって夜ごはんも食べてないと思ったら実はし!!ーちゃんは食べてほのかさ!!んは実は一人で話し!!ていて永遠と一高への憧れをかたつて次の日の

にゆうがくし!!き遅刻し!!かけ!!たんだよね!!」

うん次はサ行だね。何かすごーく私に関する重要なこと言っていた気がするんだけど全くわかんない…

「恭弥くん、一旦落ち着こう?」

「ほ、ほのかさんが僕に触った僕に触った僕に触っぽおーうっ!!」

「き、恭弥くん!?しっかりて!こんなところで寝ちやダメーっ!」

「やっぱり私この人と2人つきりなんて無理みたい。」

「ほのかさん!!!」

「は、はい!!!」

倒れ込んだと思ったら突然立ち上がって大声で私の名前を叫んだ。それはもう本当に大きな声で。周りにいる人全員が恭弥くんに注目する。

「こ、今度はどうしたのそんな大声で…?」

「ほのかさん…」

「は、はい…」

今度は静かな声でつぶやくように私の目を真剣に見つめて…

「ほのかさんはたっちゃんはどこにほれたんですか!!!?」

あ、さつきと呼び方違う。結構適当なんだなあ…え?

「き、急になんでそんなことを!」

「別に急ではないと思うのです僕はほのかさんが好きなのであつてそのほのかさんがたつていんにぞっこんラブである理由を聞くことくらい不思議ではないはずで!!!」

「き、恭弥くんに正論を言われた!」

というかまた達也さんの呼び方が違う…

「なんだって!!!それはつまり僕が正論を言うのがおかしなことだっていうのかい!?!」

「…!?!き、恭弥くんがなんだってから始めたのにまともな返事が返ってきた!?!」

「なんだって!!!それはつまり今まで僕が何を言ってるかすらわからないうやつだつていうのかい!?!」

「うん!!!」

「なんだって!!!そんな酷いじゃないかほのかさん!!!なんでそんなことずっと黙ってたんだい!?そうやって僕をバカにしていたのかい!？」

「みんなずつと言ってたよ!?恭弥くんが人の話をあまり聞かないからだよ!？」

「なんだって!!!僕はきちんとみんなの話を聞いているよ!!!ほのかさんと話したことなんてそれがいつどこで話したことなのか分単位で覚えてるくらいなんだよ!!!」

「さつきそれっぽい発言聞こえたけど流石にないかな〜つてスルーしたけどちよつと本気で怖いよそれ!？」

「なんだって!!!好きな人との思い出を大切にすることの何がいけないんだい!？」

「別にそんなことは言っていないよ!!!私だって達也さんと話したことは忘れたくないけれどそれ「ほのかさん!!!」…は、はい…」

「まんまと誤魔化されかけましたがそうはいきませんよ!!!ほのかさんはたつやん☒?のどこが好きなんですか!？」

「え、えと、それは…」

「さあ!!僕はどうなことを言われたって耐えてみせる!!」

「…き、きつかけは一高の入学試験だったの…。実技試験の時にね、私と達也さんは同じところで試験を受けて「もういいです皆まで言うな!!!」…まだ大したこと何も言っていないよ!？」

「よし!!ほのかさんが達也さんへの愛を語って下さったおかげでもう一度言っておこうと言う気持ちになりましたので言わせていただきます!!!」

うんまだ何も語っていないんだけどね。それにあ、愛なんて…うう…

「う、うん、何かな…?」

「ほのかさん…」

「は、はい…」

「ほのかさん大好きです!!!」

「え、ちよ、こんな道端で急にっ…!？」

「いいえ言わせてください!!ほのかさん、例えほのかさんが司波達也

ん☒?のことをどれだけ愛していようとも僕はあなたのことを諦め
せん!!! 一目見た時から僕はあなたのことには心を奪われてしまったの
だから!!! 必ずたつやん☒?からあなたのものを奪ってみせます!!!」
「うん…がんばってね…」

まだ知り合って一週間。そんな人に二度も告白された。私には他
に好きな人がいるのに。彼の好意は本気であることがわかるしけれ
ども私は彼のが好きなわけでもない。他に好きな人がいるのに、
達也さんが好きなのに、私はこの人と付き合ったら毎日が楽しいのだ
ろうと思つた。別に嫌いじゃないけど好きというわけでもない。け
れど私はこう返事をしていた。

「ひゆうひゆうくやるじゃねえか西郷のく」

「がんばれよ」

「付き合ったら教えてね西郷ちゃん」

「お前ならやれるよ西郷どん! なんてつたつたつたああの店のジジイの愛人
のバアさんの姉貴の孫なんだ!」

「そうだぜドン恭弥! お前はあのジイさんの愛人の息子の母親の姉貴
の娘の息子なんだ! そんなお前にできねえかとはねえよ!」

気づけばこの再告白をこの道を通る人のほとんどが見ていた。こ
こはまだ学校のすぐ近くであるため一高の生徒も結構いる。という
か今叫んでいたおじさんたち誰だろう…

「なあ風祭、こいつらほんとに入学して一週間なんだよな? こんなと
ころであんなラブコメやってるけど普通あんなの知り合つて一週間
ちよつとのやつがやるようなことじゃないんだが…」

「きつとあいつらが生きている世界と私たちが生きている世界は時間
の流れが違うんだよ。さっきの話も聞いただろ? あいつらまだ入学
一週間のくせに手作りお弁当まで作つて、そしてさっきのお姫様抱つ
こだ。世界そのものが違うのさ」

「説教はまだ終わってないのにどこへ言っているんだ風祭、萬谷」

「げっ」

次の日の放課後、私たちは雫の希望でバイアスロン部へ見学に来ていた。雫は昨日のうちに説明を受けたみたいだけれど私と恭弥くんは初めてなのでまずは競技の説明を聞くこととなった。

「魔法で撃ち抜く…」

このバイアスロンという競技はスケートボード（冬はスノーボード）で移動しながらコースに設置された的を魔法で撃ち抜いき、ゴールまでに撃ち抜いた的とゴールタイムを競う競技だそうだ。

雫がものすごく入りたがっているようなので私も入ることにした。すると恭弥くんも私に続いて入部しようとしたのだが1つ問題があることを思い出した。

「恭弥くんって加速とあのサイオンの鎧以外に使える魔法ってあったっけ？」

「達也さん曰くただアホなだけであって普通に使える魔法もあるはずだって言っていたけれど…」

達也さんはもつと優しい言い回しだったと思うけど。

「ふっふっふ…なんと、僕はこのサイオンの鎧からサイオンの弾を撃ち出すことに成功したのです!!見てください!!」

そういうと恭弥くんはサイオンの鎧を纏って右手を天にかざした。

改めて見ると不思議なものだ。恭弥くんは基本的に加速時にしかサイオンの鎧を纏うことがないためあまりはつきりと見ることができないのだけれどこうしてみると淡い緑色の光が恭弥くんの全身を覆っている。そういえば昨日、雫は一瞬だけれどこれを体験したそうだ。一体纏っている方はどのような感じなのだろう…

「はっ!!」

すると右手から緑色のサイオンの塊が放出され空へと飛んで行った。

「どうです!!」

どう、と言われても…

「サイオン粒子塊射出とは違うの?」

雫の言う通りすごく似ている。

「チツチツチ」

恭弥くんが指を振りながらそれを否定してきた。言い方が気に障ったのか雫にスネを蹴られている。

「ぼ、僕はサイオンの密度を変えられるんです!!すごいでしょ!」

そういうと次は地面に向けて先ほどのサイオンの塊を撃つ。そしてその塊は地面にぶつかると弾けて消えてしまった。

そしてもう一度サイオンの塊を放つと次は地面が少しかけた。

「どうでしょう!!威力もだいぶあげれるんです!!そしてCADいらず!!どうでしょう!!」

確かなこれならいけるだろう。部長である五十嵐先輩も少し驚いているみたいだけどこれならば競技に問題はないとのことだ。

そして恭弥くんにはあの最速音速を超える加速がある。もしかしたら恭弥くんはものすごい選手になるのかもしれない。

と思ったのだが

「前に進みません!!」

「「……」」

どうやら恭弥くんが加速できるのは自分自身のみらしくスケートボードを加速で動くことはできないらしい。そして恭弥くんは他の魔法が使えない。

「ど、どうしたらいいですか!」

「あ、うーん…そ、そうだ私もそろそろデモの時間だからちよつと行くね!」

「え、部長?五十嵐部長!」

み、見捨てられた…

「…とりあえず私たちもデモ見に行く?」

「そ、そうしよつか…」

「は、はい…」

異様に落ち込んでいる恭弥くんをなだめながら私たちもデモに向かおうとしたのだが、サイオン波酔いを起こしていた狩猟部の人たち

と遭遇し、介抱を手伝うことになり、その間にデモは終わってしまった。
ていた。

「3人ともさつきはありがとうね。私は明智英美。日英のクウォーターで正確にはアメリカ⇨明智⇨英美⇨ゴールデイ。エイミイって呼んでね」

「私は北山雫。よろしく」

「光井ほのかです。よろしく…エイミイ」

「うんよろしく！雫、ほのか！」

勢いよく手を握ってくる。フレンドリーな人だなあ。

「それでこちらのあなたは？」

「はじめまして!!僕は西郷恭弥!!気軽に名前でもらってかまいません!!なんなら僕もあだ名でも!!この前真由美さんに恭ちゃんってあだ名をつけられたんだ!!でも結局呼ばれてなくて寂しいからそう呼んでもらっても大丈夫だよ!!」

「あ、うんよろしくね、恭弥くん」

フレンドリーなエイミイでもちよつとひいてるみたいだ。私たちの時もそうだったけど勢いのある挨拶は初めての人は誰だってそうなるだろう。あの達也さんでも少し気圧されたくらいだろうだし。

「あだ名でもいいんだよ!!」

「え、遠慮しておくわ…」

そんなにあだ名で呼んで欲しいんだ…

「そんなに呼んで欲しいならほのかに呼んで貰えばいい」

「え、私？」

「そ、そんな、ほのかさんが僕をあだ名で呼ぶなんて…恥ずかしい!!!」
前もそんなこと言っていたような…やっぱり彼の羞恥心はよくわからない…

「そんなことでは達也さんには勝てないよ」

「た、たっていんに…」

どんどん達也さんの呼び方が変わっていくような…というか雫は一体何を言いだすのだろう。

「そう、今は恭弥もたっていんも同じ名前呼び。けれどここで恭弥が

あだ名で呼ばれるようになるにあだ名呼びと名前呼びと2人の呼び方に差が出てくる。つまり呼び方では恭弥の方が勝るということ。達也さんとはレベルが違うんだよ」

「た、たつぽんに、勝る…レベルが、違う…」

呼び方一つで何か変わるものなのかな…?

「恭弥それであなたはどうするの?」

「あだ名で呼んでもらいます!!!」

「よろしい。ならば恭弥もあだ名で呼ぶでき」

「イエスマム!!!ほ、ほのかさん!!これから自分のことはあだ名で呼んでもらえませんか!?自分はほのかさんのことを…のんちゃんと呼びます!!!」

い、一体この2人はなんなのだろう…

「というかそんなの無理!!お互いにそんなあだ名で呼び合うなんて恥ずかしいよ!!!」というかのんちゃんってどこから来たの!?!」

「ほのかののをとったんだね。森…くんや達也さんにつけたあだ名のセンスから少し心配だったけどましでよかった」

「そうだね変なのじゃなくてよかった…じゃなくてそういう問題じゃないよ!!それに森…くんはともかく達也さんなんてあだ名統一してないけどね!!」

「どうしても呼んでくれないというならば自分は呼んでももらえるまで!!よ、呼んでももらえるまで、呼んでももらえるまで…どうしましょうしーちゃん師匠!?!」

「泣けばいい」

「泣きます!!!」

「泣かれても呼ばないよ!?!」

ほんとなんなのこの2人!?!

「仕方ない、ほのかの小学校の頃の恥ずかしい話を…」

「な!?!ひ、卑怯だよそんな昔のことだしに使うなんて!?!」

「小3の夏の別荘の話?それとも小4の授業中の話?それとも小6の修学旅行?」

あ、悪魔だ!!いつのまにか雫はこんな悪魔になっちゃったの!?!

「き、き、きよ、きようちや」待つてください!!」「…」

「そんな脅しのようなことをして呼んでもらっても意味がありません!!」

「泣くのも脅しだけどね」

「脅して呼んでもらうくらいなら今のままで結構!!呼んでもらえるまで僕は待ちます!!」

「だってさほのか」

「……昨日助けてくれたりとかこういうところは無駄にその、か、かつこよかつたりする…」

「き、恭ちゃん…」

「の、のんちゃん…こ、これか!~らも恭ちゃんって呼びつづけ!てね僕もこ!れか!~らはのんちゃんってよびつづけ!るか!~らねやつぱりほのか!~さ!~んいやのんちゃんは天使だねいや女神だやつぱりのんちゃん大好きだ!!」

「うんだから力行で区切るのやめよ!」

最後の方区切ることなく言い続けたからすごい恥ずかしいこと聞こえちやつたけど聞かなかつたふり。ものすごい恥ずかしい!!!

「ぷ、ぷしゅ〜」

「き、恭ちゃん!?!今度はどうしたの!」

「どうやらあだ名呼びが恥ずかしくて過ぎて気絶したみたい」

「……………まだ私たち入学して一週間なのにほのかたちはなんでそんなに濃いラブコメしてるの?もしかして私が薄いのか?というか私があなただ達とはじめましての挨拶なのになんでこんなに空気なの?」

そ、そういえばそうだった…

「あ、ごめんエイミー。忘れてた」

「あれ、どうしてだろう、校舎の中だから陽の光が当たらないのかな?自分の影が薄く見えるよ…」

「ご、ごめんねエイミー!!」

第6話 「僕はバカじゃない!!」

彼はきつとアホなんだと思う。別に勉強ができないとかではない、アホなんだ。入学式でのあの告白騒動、入学3日で森宮くんと模擬戦してこけて少しの間だけど森宮くんの性別変えちゃうし、それに今週はOGに拉致された想い人を追ってそれを止める手段として校舎裏の破壊、そしてその後、道端での公開告白。

まだ入学して一週間しかたっていないのに達也くんとは別の意味で有名人になっている彼。

そして今日は、今日は…

「ほんとなんなのよ!!!あなた一体なんであんなことしたの!？」

「足が滑ってしまいました!!」

「足が滑っただけであちこち破壊されたらたまったもんじゃないわよ!!!」

そう、今度は実験棟の並木道を破壊してきた。もうなんなのこの子。

それにその場の被害者?である達也くんからの報告書にもわけのわからないことを書いているし…そりやこの子が絡んでたらそうなるかもだけど…それでも!

「突然空から降ってきたって何よ!？」

「違います真由美さん!!屋上からハイフライフロアです!!」

屋上から並木道めがけて屈伸式ダイビングボディアプレス!

「いやほんと何してるのよ!?!というか屋上で何してたのよ!!」

「たつなりの監視です!!」

よし、一旦落ち着こう。はいすつてゝ、はいてゝ。

うんもうやだこの子。森宮くんと同じで達也くんに惚れちゃったの?入学早々告白事件を起こしていたのに光井さんはどうしたの?というかそれあだ名じゃなくてももう違う名前になっちゃってるし。

「なんでそんなことしてたの?」

「故意に魔法で攻撃されているたつちーを見たのんちゃんとしーちゃんといエイミイが現場の証拠を抑えて生徒会に見せれば取り合っても

「うん誰？」
「うん誰？」

この前光井さんをあだ名で呼ぶのは恥ずかしいって言ってたし光井さんじゃないとしたら…うん誰？何この子、ほんとにもう乗り換えちゃったの？確かにあの模擬戦の時だけでみてわかるくらい光井さんも達也くんにごっこんラブだったれど、一昨日公開告白で諦めません宣言してたんじゃないの？

「僕は西郷恭弥です!!!この前恭ちゃんというあだ名をつけてもらったはずですがお忘れになってしまったのでしょうか!?生まれてこのかた一度会ったことのある人には忘れられたことがないためかなりショックです!!!」

「うん知ってる忘れてない大丈夫もうほんといやあなた」

「なんだって!!!ちゃんと覚えていてくれたんですね!!まじですよね!!」

「うんエンセリオ、まじだからその子たち誰か教えて」

「では一体誰に聞いたのでしょうか!?ま、まさか…真由美さん、幽霊なんてもの、まだ信じているのですか!?そういうのは中学生で卒業しておきましょう!!!」

「うん違うしあなた中学生まで幽霊信じてたのね。普通みんな小学生で卒業してるわよ。それと誰か聞いているのはあなたと一緒に達也くんを監視してた子達のこと」

「のんちゃんとしーちゃんとエイミイです!!」

「だからそれが誰なのかわからないのよ!!」

「おそらくそれは光井ほのかさんと北山雫さん、それと明智英美さんという方だと思います、会長」

すると扉の方から恭弥くんとは違う声が聞こえてきた。今は私以外の他の役員は別の仕事で生徒会室を出払っている。その一人が戻ってきたのだ。本来なら今私がしていることも懲罰委員会の仕事であるはずなのだけれど会話が成立しないと私の方へ連れてこられたのである。何を思っただけならこのアホと話ができると思ったのだろうか、あとで話をする必要があるわね。

「ただいま戻りました、会長」

「おかえりなさい、深雪さん」

それで結局光井さんのね…あれ？てことはあだ名呼び？

「恭弥くん光井さんのことあだ名で呼んでるの!？」

「そうなんです!!これでたつきちより一步リードなんです!!」

「恥ずかしいんじゃないの?」

「一度気絶しました!!」

あ、やっぱ恥ずかしかったんだ。というかそれだけで気絶ね…シャイなのかなんのかほんと不思議な子ね…。いつそのこと光井さんと付き合ってくれたら…

「それで会長、どうして恭弥くんがこちらに?」

「屋上から時速800キロの速さで達也くんめがけてボディプレスして実験棟の並木道を破壊したのよ」

「お兄様を?」

あ、これ深雪さんには言っではいけないやつだ。でももう遅いか、すごく寒い。やつと過ぎ去った冬が戻ってきたみたい。

「どうゆうことですか、恭弥くん?」

「誤解だよ深雪さん!僕はたつにやんを狙ったんじゃないよ。たつにやんを狙っていた人を狙ったんだよ!!!足が滑ってたつにやんの方へ行っちゃったけど!!」

珍しく恭弥くんが怯えてる…。そういえばよく森宮くんと一緒に氷漬けにされてるって話を聞いたことがある。ほんと一体なにしてるのかなこの子

「結局はお兄様を攻撃したことは変わりないのですよね?」

「大丈夫だよ安心して!!怪我したのは僕だけでやんたつは華麗にかわしたから!!」

実は恭弥くん怪我してます。包帯まみれでちゃんと治療したあとにここにきています。

「言い訳は聞きたくありません」

「ひっ!?お、お慈悲をくっ!!!」

あ、凍らされた。

数十分たつてやっと恭弥くんが元に戻った。

「とりあえず恭弥くん、3つ言わせてもらおうわね」

「なんででしょうか!？」

「まず1つ、校内での魔法の不適切な使用は禁止しています。前は光井さんと北山さんをたすけるため、今回は達也くんを故意に攻撃した生徒を捉えるためということだけど過剰防衛すぎるの。前は摩利が原因であるOG2人の責任にしたけれど今回はきちんと懲罰を受けてもらいます」

「わかりました!!以外このようなことがないよう気をつけます!!」

「2つ、今後このような事態にあったとしても加速魔法で出している速度は200キロまで。SSボード・バイアスロン部に所属するようだけでも、部活でもその速度制限は守ってもらいます。ただし、普通そんなことは起こらないのだけれど、もし命が危ないような危機に瀕した時のみ使用を許可します」

「死にそうな時だけ全速力ですね!!わかりました!!」

「そして3つ」

「今度はなんでしょう!!」

「特にないわ」

「なんだって!!!」

??その後しつかりと罰を受けました??

そして勧誘週間も終わり恭弥は並木道を破壊した罰として今月中は放課後、部活前に構内の清掃活動をする事になっていた。そのためいつもなら全ての講義が終わるとすぐにAクラスへやってきて一緒に帰っていたのだけれど最近は私と雫だけで先にクラブへ向かっている。

そして達也さんを狙っていた生徒の写真を生徒会に匿名で投稿したけれど音沙汰はなく、自分たちが撮った写真があまり証拠となるようなものではなく少し自己嫌悪に陥っていた時に剣道部の主将であ

る司甲を見つけて跡をつけることにした。

「どごへ行くんだらうね。そろそろ学校の監視システム外にでるよ」
「そうだね…」

エイミイが朝はキャビネットで登校しているのを見たことがあると言っているため司甲の家がこつちの方角というわけではないようだ。

不安が溢れてくる。それは雫もエイミイも同じようだ。けれど私たち三人なら大丈夫。そんな浅はかな考えで私たちは引き続き跡を追うことにした。

「あつー！」

すると突然彼は走り出した。もしかしたら私たちのことに気づいたのかもしれない。とにかく私たちは司甲を追うことにする。

「あれ？いない…」

路地のようなところに入ったところで突然司甲は姿を消した。

「……!?!?」

突然のエンジンの音に驚くのも束の間バイクに乗った男たちに囲まれてしまった。

怖い。明らかに私たちに敵意を示している。

「二人とも、合図をしたら走るよ。CADのスイッチを入れて」

こんな状況なのに雫は落ち着いている。私はただ焦るしかなかったのに。そう思いつつも言われた通りCADのスイッチを入れて走る準備をする。

「ふん、コソコソと嗅ぎ回って…我々の計画の邪魔をするネズミは…」

そう言つて一人が近づいてくる。

「今!!」

雫の合図とともに私たちは走り出す。

「逃すな!!」

「ただの女子高生だと思って、舐めないでよね!!」

エイミイが追ってくる男の人たちに魔法で迎撃する。

「エイミイ!?!」

「自衛的先制攻撃つてやつだよー！」

やりすぎにも思えたが私たちはなりふり構っていられなかった。

「それなら私も！」

目くらましの閃光魔法を使う。

「ぐっ、目が…!？」

相手の男の人たちの目を潰し、全員無力化した。これならいける。無事逃げ切れる。

「クソッ…化け物め…これでもくらえ!!!」

そういつて一人が指輪のつけた腕を前に出すと突然頭に激しい痛みが走った。

「きゃあっ!？」

痛みに私たちはその場に倒れこんでしまう。逃げなければいけないのに…痛みに耐えられず立ち上がることもできない…

「ふふ、苦しいか？司様からお借りしたアンティナイトによるこのキャストジャミングがある限りお前らは一切魔法が使えない」

あ、アンティナイト…なんでそんなものを…

アンティナイトは一般市民が手に入れることのできないものだ。

色々考えようとするけれど痛みが思考をさせてくれない。

「始末するか」

「ああ、手筈通り」

始末…つまり殺すということ。怖い。けれど逃げれない。頭が割れるように痛い。逃げれない。なんでこんなことに…ただ私たちは達也さんに手を出す人に処罰を受けて欲しかっただけなのに…

「我々の計画の邪魔をするものは消えてもらう」

そういうと男はナイフを取り出した。

ああ、殺されるんだ。私はここで殺されてしまうんだ。私も雫も工

イミイも…

ナイフが振り下ろされる。私は恐怖に目を瞑ってしまう。

「だ、誰か…」

達也さん…

「200キロ減速豪腕ラリアット!!!」

ナイフは振り下ろされることなく目を開けると男は三回転して倒

れてしまった。

「貴様ら、のんちゃんたちに何をしている!？」

「き、恭ちゃん…」

ああ、この人はいつも私たちを助けてくれようとしてくれる。

「き、恭弥が、なんでここに…」

「清掃活動をしていたら、のんちゃん達が剣道部の主将先輩を追って行くところが見えてね!!彼がたつなりんに危害を加えようとした人なんだろ!?!だったら、のんちゃんたちも危ないかもしれないじゃないか!?!それより大丈夫かい!?!」

「だ、大丈夫だよ…ただ、あの人のアンティナイトが…」

「なんだって!!まさかこれはキャストジャミングだって言うのかい!?!」

よかった、ちゃんとそれくらいは知ってるんだ。そういえばアホなだけで勉強ができないわけじゃないんだった。

「そうだ!!しかしなぜだ!?!お前も魔法師だろ、なぜ動いていられる!?!このアンティナイトは高純度の特注品なんだぞ!?!」

「めっちゃ頭痛いわ!!!けど僕がやらなきゃ誰が三人を助けるんだい!?!魔法は使えないけれど僕だってある程度武術の心得はあるんだよ!!!」

「ならば今見ると魔法を使ってこいつを吹き飛ばしただろう!?!それは一体どうしてだ!?!」

「遠くから加速してきたんだ!!途中で効力が切れてもバランスさえ保てればそのままいける!!減速したとしても元の速さが段違いだったら関係ないんだよ!!!そして頭が痛いからそれやめてくれるかな!?!」

「おい、出力を上げろ!!」

「やめてよ!!!」

そういうと恭弥くんはアンティナイトの指輪をはめた人に突撃して行く。

「バカか、ただ突っ込んでくるやつがあるか!!」

「僕はバカじゃない!!!真由美さん曰く僕はバカじゃなくアホなんだ!!!」

どつちでもよくない？

恭弥くんは振り下ろされるナイフ足で蹴り飛ばし、そのままを右手を左手で掴みそのまま脇の下潜り抜ける。そしてそのまま振り返るように方向転換する。相手の右手を左手で掴んだまま向かい合った形になる。そしてその手を自分の方へ勢いよく引き寄せて

「レインメーカー!!!」

胸板に目掛けてラリアットした。

そうして一回転して倒れこむとそのまま気絶したのかキャストジャミングの効力が切れる。そして頭痛も段々となくなる。

「よし、魔法が使える!!さあ、お前の罪を数えろ!!加速200キロ高速スリングブレイド!!」

恭弥くんは残っている二人のうちの一人にもすごい速さでランニングネットブリーカーを仕掛けた。いや、あれは変則ランニングネットブリーカーだ。地面に叩きつけられその男も気絶したようだ。

そしてきつと今の決め台詞は○面○イダーじゃなくて○橋○至よ!

「く、来るな!!こいつがどうなつてもいいのか!」

残りの一人は雫を人質に取ろうとするが。

「遅い!!!倍速400キロ高速ドロップキック!!!」

言うが早いか超スピードで男の顔を蹴り飛ばした。男はその反動で壁の方まで飛んでいきヘルメットごと突き刺さる。

死んではいないのだろうか、少し不安になる。

けれど…

「みんな、もう大丈夫だよ!!怪我はないかい!」

助かった。よかった、本当に死んじゃうんじゃないかって思った。

「う、うん、大丈夫。ありがとう、恭弥くん」

「私も大丈夫。本当にありがとう、恭弥」

「いえいえ、なんてことないよ!のんちゃんは大丈夫かい!」

「う、うん…本当にありがとう…。ちよつと腰が抜けちゃって、今は立てないかも…」

安心からか少し泣きそうになってしまう。腰も抜けてしまい、どうやら立てそうにない。

「みんな、一体何があったの!？」

「深雪!？」

突然深雪が私たちの元へやってきた。深雪は生徒会の発注ミスの訂正に近くのお店に訪れていたようで、キャストジャミングの耳障りなノイズを感じ取ってここへきてくれたようだ。

私たちはこうなるに至った経緯を説明する。

「この人たち、気絶しているだけで死んでいないわよね? 一人壁に埋まってるけど…」

「大丈夫だよ!! ちゃんと手加減したし!!」

「そう、ならいいのだけれど…」

「いずれ監視システムが発見してくれると思うけど、警察に連絡したほうがいいかな?」

「それはやめておいた方がいいかも。現場を見るに明らかに過剰防衛だし逆にこちらが訴えられる可能性もあるわ」

辺りを見渡すと明らかに無事ではない男の人たちの様子が見て取れる。流石にこれだとそう思われても仕方ないだろう。

「もしみんながいいならここは私に任せてくれないかしら?」

私たちは深雪に任せることにした。

そして私たちは先に帰ることにしたのだけれど…

「恭弥、ほのかが立てないみたいだからおんぶしてあげたら?」

「ちよ、雫!？」

突然何を言い出すの雫!? 私はもう大丈夫。一人で立てる。あ、あれ、まだ立てない…

「そ、そんなの無理だよ恥ずかしいよしーちゃん!!!」

「お姫様抱っこよりはハードル低い」

「お、お姫様抱っこ!? 二人ともそんなことしてたの!？」

エイミイが驚いたように反応する。それはそうだ、エイミイも私がすでに達也さんに好意を抱いていることも知っており、私は恭ちゃんの気持ちに込えていないのだから。

深雪も頬を少し赤らめているようだ。

「そうだよ。それより恭弥はもうそろそろそういったことに慣れるべ

き。たかがおんぶでそういった反応をするのはうぶすぎる。人前で告白できるくらいなんだからなんだってできるはず」

「わ、わかりましたしーちゃん師匠!!!のんちゃんはお胸が平均に比べると大きいようですので意識してしまいましたでしたが気にせずおんぶします!!!」

「む、胸とかそんなこと言わないで!!!」

あ、雫に蹴られてる…

結局私は恭弥くんにおぶられて帰ることになった。

「ねえ、雫」

「何ほのか?」

「もうそろそろ写真撮るのやめない?」

第7話 『この学校に用務員なんていねえ!!!』

『全校生徒の皆さん！僕たちは学内の差別撤廃を目指す有志同盟です』

「え、なに!?!」

全ての講義が終了し部活動へ行こうとしていた時、突然この放送が流れ出した。

「うるさいぞ！どこの馬鹿だ、抗議してやる!!」

「差別ってなんだよ!」

案の定二科生のことを見下しているクラス男子たちは騒ぎ出した。

『魔法教育は実力主義。それを否定するつもりは僕たちにもありません』

すると深雪の携帯端末に連絡音が鳴った。

「この件で呼び出し?」

「ええ、そうみたい」

どうやらこの放送のことで生徒会から呼び出しがかかったようだ

『しかし校内の差別は魔法実習以外にも及んでいます。例えば魔法競技系クラブに割り当てられる予算はそうでないクラブよりはるかに優遇されています』

「もう行かなくちゃ。ほのか、雫また明日」

「うん、また明日」

「がんばってね」

そういうと不安そうに深雪は教室を出ていった。

『僕たちは魔法師を目指し魔法を学ぶものです。しかし同時に僕たちは高校生です。魔法だけが僕たちの全てではありません！僕たちはこの差別撤廃について生徒会と部活連に対等な立場での交渉を要求します。この要求が聞き入れてもらえるまで僕たちは放送室から動くつもりはあり「なんだって!!」…誰だお前!?!』

「…ねえ雫、今の声って」

「恭弥だね」

な、何やってるの…?」

『そんなことはいけないよ!!なぜこんなことをするんだい!?!』

『お前も二科生ならわかるだろ?一科生のやつらにウィードと蔑まれてバカにされて、というかお前誰だよ!?!いつからここにいた!?!』

『確かに僕だってそう呼ばれたことはあるよ。毎日一科生の教室へ行っていたら毎度飽きもせずもつくくんが僕にそう言つて突つかかってくる。けれども僕をバカにしない人だっているんだ!!僕は加速魔法しか使えないんだ。けれどのおんちゃんやしーちゃんはそのことをバカにしたりせずに加速魔法のことを褒めてくれたんだ!!君たちだつてあるだろ!?!誰かに認められていること!!』

『僕の名前は森崎だ!!』

『うるさい!!そんなやつが数人いたところでなんだつてんだ!!それよりもなんだお前!!どうやってここにはいったんだ!!』

『数人でいいじゃないか!!万人に受け入れられる人なんていない!!君たち自身が一科生に劣等感を覚えているんじゃないのかい!?!』

『いいから人の話聞けよまじでお前誰なんだよ!?!どうやってここに入ったんだ!?!』

『僕は一年E組の西郷恭弥です!!気軽に名前で呼んでもらっても構いません!!あだ名でも可です!!どうしますか!?!』

『誰も自己紹介なんか求めてねえよ!!』

『しかし今お前誰なんだと言われたのですが!?!』

『めんどくせえなお前!!もういいからそれよりどうやってここに入った!?!』

『清掃活動中に用務員の重盛さんと仲良くなつてね、この放送が聞こえてきたら放送室の鍵を貸してくれたんだ!!だから僕は君たちの説得に…』

「ねえ雫、この学校にそんな人いたっけ?」

「わからない。この学校も広いからまだ見たことないだけかもしれない」

『この学校に用務員なんていねえ!!』

『なんだって!!』

「…そろそろ部活行こつか、雫」

「そうだね…」

『じゃあ誰なんだいあの人は!!』

『俺たちが知るか!!いきなりやってきてなんなんだよほんとお前邪魔すんなよ!!』

『いいや邪魔するよ!!君たちの主張は間違っているんだ、魔法以外で評価をしてほしいなら魔法以外で結果を残すべきだ!!君たちは一体魔法以外でどんなことをしたっていうんだい!?そして僕の見た用務員の重盛さんは一体なんだったんだい!』

『突然まともなこと言うんじゃねよもうお前黙ってろよ!!』

『なんでそんな酷いこと言うんだい!?あ、口元にチョコついてるよ!放送する前に食べたんでしょ!』

『やかましいわ!!!全校生徒が聞いているんだ、緊張してたんだ!!!』

『あ、すまない、電話がかかってきたので少し席を外すね』

『ほんと勝手だなお前!!!』

『もしもしたつやん☒?かい?カギを開けろって?あ、すまない、カギがかかっていたものだからつい入った後に閉めてしまったよ。今開けるね』

『おい待て何するんだ!?やめろ、カギを開けるな!!!』

『え、なににない?そこの先輩方、どうやら十文字会頭とやらが先輩方の要件を受けてもいいと言っているそうです!』

『か、会頭が!』

『だから大人しく出てこいと!』

『そ、それなら仕方ないか…』

『おい、カギを開けろ』

『今だ、総員突入!!』

『な、なに!』

『風紀委員だ、大人しくしろ!!』

『CADの不正使用で逮捕する!!』

『委員長、違反生徒五名の捕獲完了しました!』

『ど、どうゆうことだ俺たちを騙したのか!』

『誰もお前たちを騙してなどいない。お前たちの言い分は聞こう。交

渉にも応じる。だが、要求を聞き入れることとお前たちのとった手段を認めることは別問題だ。そしてその一年、用務員の重盛さんは俺たち三年がまだ一年だった頃に寿命で亡くなられたはずだ』

そのまま一言謝罪が入るとその放送は切れてしまった。

次の日にはその放送の方たちに対して生徒会長が討論をすることになったそうだ。

そして恭ちゃん曰く用務員の重盛さんはその後二度と姿を現さなくなつたそうだ。

そして討論会当日、私たちはバイアスロン部で部活動に勤しんでいた。

「討論会、どうなつたかな？」

「気になる？」

そろそろ討論会が終わつた時間だろうと思ひ結果が気になり雫と話しをする。

「うん、私たち行かなくてよかつたのかな？」

「他人の愚痴に付き合うだけ無駄だよ、ほのか」

雫の意見は昨日の深雪の話に影響されているのかもと思わせる言い方だ。

「それよりあれ、早くどうにかしたほうがいいと思う」

「そうだね…あれ、どうしよつか」

目線の先にはスケートボードの上になり必死に動かそうとしている恭ちゃんの姿が映る。

移動系魔法などを駆使して動かすのだが恭ちゃんには難しいみたいで自身の加速で必死に動かそうとしている。

サイオンの鎧をスケートボードごと纏つたり、地面を加速を使って蹴つた勢いで動かそうとして自分だけ飛んで行つたりしている。

先輩たちも清掃後熱心に練習する姿を見ていると諦めろとも言えないし、逆に使える魔法が何かも曖昧なためアドバイスもしくく結

局恭ちゃんは一人で練習をしている。

「はいはい、みんな！今日は演習林が使える貴重な日だからガッツリ練習するわよ！恭弥くんはとりあえず動かせるようになるまでは見学ね」

「はい」

「了解です！」

そこで突然大きな爆発音のようなものが鳴り響いた。実技塔の方から聞こえてきたようだがなにがあったのだろうか。

「なにあれ！」

「実技塔から煙が上がってる!？」

みんな突然のことに驚いてしまいパニックになりかけてしまう。

「みんなむやみに動いたらダメ！今端末で情報を調べるから待機！」

流星部長だ、冷静な判断で部員たちを落ち着かせた。私もその言葉を落ち着きを取り戻す。

「…!?お、おおお落ち着いて聞いてね！」

突然部長が焦り出したことにみんな何事かと緊張がはしる。

「当校は現在武装したテロリストに襲撃を受けているわ！」

え…

「ま、マジですか部長!？」

「こんな時に冗談なんて言わないわよ！」

そ、そんな…

「護身のために一時的に部活用CADの使用が許可されています。でもあくまで身を守るためだからね」

そう部長が説明している時に突然ナイフをもった男の人が現れた。おそらくテロリストの一人なんだろう。

前に襲われた時も相手はナイフを持っていた。

怖い。

男がナイフをもって襲いかかってくるのに私は足がすくんで動けなかった。

「うわあ！」

「ほのか、大丈夫!？」

「雫！」

動けなかった私を雫が魔法を使って助けてくれた。

私は動けなかったのに、雫は怖れず撃退した…

「く、くそお「オーマイガー!!!」…へびらっ!!」

それでも立ち上がるうとした男に突然高速で飛んできたスケートボードが直撃して男は倒れてしまった。

スケートボードが飛んできた方を見ると恭ちゃんが盛大にすっ転んでいた。

…いつもいつもほんとなにしてるのよ。

「し、しまった!!誰か知らないけれどスケボーがぶつかってしまった!!ど、どうしよう、死んではいないだろうね!」

「恭弥、その人テロリスト」

「なんだって!!!どうして学校にテロリストなんかいるんだい!」

「それは知らない」

「よく見たらこいつナイフ持ってるじゃないか!?のんちゃん、大丈夫かい!」

「う、うん、大丈夫だよ。ありがと…」

恭ちゃんと話しているとなんだかナイフに怯えていた自分がアホらしくなる。

「光井、北山、お前たちは襲われなかったか?」

「あ、森…」

「ナイフを持った人に襲われたけど部員に怪我はないよ」

森脇くんは風紀委員として警備についていたようでこのテロリストを抑えにかかっているみたいだ。

討論会の会場となった講堂の方はサブマシンガンを武装した集団に襲われたらしく、しかし風紀委員長の渡辺先輩と副会長の服部先輩の活躍により無事であったことを嬉々と語ってくれた。

「もっくんじゃないか!どうしてここに!」

「僕の名前は森崎だ!って、げっ!?なんでここにお前がいる!」

「それは僕の台詞だよ!!僕はバイアスロン部の一員だからここにいるんだよ!君はどうしてだい!?それより人を見るなりげつとは失礼

じゃないかい!？」

「人の名前を覚えないうお前の方が失礼だ!!僕は風紀委員としてここへ見回りに来たんだ!!」

「なんだって!!!もっくん、君は風紀委員だったのかい!？」

「お前何度も僕が腕章を巻いてるとか見たよな!?!名前覚えなかったりとお前は光井以外のものに何も興味はないのか!?!」

「ふえ!？」

また喧嘩を始めたと思つたら唐突に私に飛んで来た…

「当たり前だろ!!!僕はのんちゃん一筋だ!!!」

「い、いきなりなんの話してるのよ!!!そんなこと大声で言わないでっ
てば!!!」

ほんとこんな時に何の話をしてるのよ…恥ずかしい…

「こんなところにもいやがったか!!クソツ、死ね!!」

「きやつ!？」

そこにまたテロリストが現れた。今度はハンドガンを持っており、銃口はすでにこちらを向いていた。

「死ね!!!」

森山くんに向かって引き金を引き銃弾が放たれる。

「森…くん!?!」

森くんは迎え撃つ準備ができておらず、無防備な状態でこのままでは銃弾が当たってしまう。

「加速200キロ!!これは貸しだよ、もっくん!!」

その銃弾を高速で森沢くんの前に現れた恭ちゃんが回し蹴りで弾いた。

「僕の名前は、森、崎だああああ!!!」

そしてしゃがんだ恭ちゃんの上から森宮くんが素早くCADを構えて魔法を発動する。

その魔法はテロリストに直撃して気絶してしまう。

「恭ちゃん、森上くん大丈夫!？」

「僕は大丈夫だよ!!!」

「なあ光井。俺さ、森崎駿つて言うんだ。けど最近だ「なんだって!!!」

…何がだよ!？」

「も、もっくん…し、しゅんって名前だったのかい!？」

私もそれはじめて知った…。

「私も初知り」

あ、よかつた。雫も一緒だ。

「そうだよ!! ついでに上は森崎だ!!」

「じ、じゅんじゃなかったのかい!？」

「惜しいな!!」というか誰が言ったんだよそんなこと!! お前と出会って

から下の名前乗ったことないのにどっから出て来たんだよ!!」

「だ、だってもっくんが女装性癖に目覚めた時に名前は純子って…!!」

「目覚めてないしお前のせいだ!!」そして順子じゃなくて駿子だ!!」

ちゃんとあの時のこと覚えてるんだね。

「黒歴史だね!!」

「やかましいわ!!」

学校がテロリストに襲われてるって言うのにこの二人は何をコントしてるのだろうか？

「僕はお前のせいで色々と酷い目にあってるんだぞ!! 今週のお小遣いは全部化粧品になってしまつて、生徒会や風紀委員会では僕は森み「こんなところにもいたのか!？」…ぼ、僕の、僕の名前は、」

唐突に語りだした森宮くんの言葉を遮るように今度もハンドガンを武装したテロリストが現れた。

「僕の名前は、森崎だあああいやあお!!」

今度も先ほどと同じセリフを言つて魔法を放つ。

きつとこれが森坂くんの決め台詞なんだと思う。

そしてテロリストは先程と同じように気絶してしまった。

そして森山くんは気絶した三人のテロリストを拘束して指揮を執る十文字会頭のところまで行つてしまった。

去り際に彼はこう言つた。

「僕の名前は森崎だ」

やっぱりそうなんだね。

そうしてその後この事件は無事に解決し、ブランシユ事件と呼ばれるようになった。

第8話 「好きじゃ!!!」

ある日、学園専用の端末に期末試験の順位が公表されていた。

総合順位

- 1 司波深雪 (1ーA)
- 2 光井ほのか (1ーA)
- 3 北山雫 (1ーA)

実技順位

- 1 司波深雪 (1ーA)
- 2 北山雫 (1ーA)
- 3 森宮駿 (1ーA)

理論順位

- 1 司波達也 (1ーE)
- 2 司波深雪 (1ーA)
- 3 吉田幹比古 (1ーE)

そしてこれが今回の試験結果である。

この成績を参考に九校戦の選手を決めるため今回は皆んな一段と気合が入っていた。

かく言う私も雫とエイミィと共に勉強会を開くなどして試験に向けて懸命など努力した。

総合順位2位という結果に私は大変喜んだし、雫も同じだ。深雪は当然のように1位を取っているのは流石だと思うし、敵わないとも思った。

ただ一つその深雪が1位を取れなかったのが理論、そしてその1位が二科生の達也さんなのは尊敬できるし憧れる。クラスのみんなはそのことに不満があるようで採点ミスだズルをしたんだと喚いている。

けれどその声もはたと止んだ。

そして、

「お、おい、嘘だろ…?」

「だ、だれか、嘘だと言ってくれ…」

「あ、ありえねえ…」

「ま、まじわるた…」

「ぼ、僕の名前は、森崎…だ…」

「まじ出」

そのことが真実であると受け止められず、ほとんどの人が驚愕の言葉を口に出している。意味のわからない言葉もあるけれど。

森宮くんはこんな状況で決め台詞を言うのはある意味すごいと思っただ。恭ちゃんとコントができるのも納得できる。

「あ、あれ?俺って本当に森崎…なのか…?」

などと訳のわからないことも言っている。かわいそうに、多分恭ちゃんのアホが伝染したんだと思う。

私も気をつけないと…もうすでに学園中が手遅れなのかもしれないけれど。

多分その場で平常心を保っていられたのは深雪くらいだったと思う。なんかキラキラしてるし。

私もこれには驚いて声も出なかった。雫ですらなんとも言えない表情を…無表情だった。

…みんな絶望に打ちひしがれたのだ。

理論順位

- 1 司波達也 (1-E)
- 2 司波深雪 (1-A)
- 3 吉田幹比古 (1-E)
- 4 西郷恭弥 (1-E) ??不正ではありません??

アホに負けた。

もう一度言うね、アホに負けた。

この上位三人以外あのアホよりバカであることが証明された。

そういえば入試成績11位って言ってた気がする。恭ちゃんが嘘

をつくはずがないってわかってはいるけど、今初めて本当だったんだって信じた。みんな同じだと思う。

恭ちゃんは並木道を破壊して有名になり、あの放送で学園公認のアホとなった。一年では生徒会で学年総代の深雪や二科生で風紀委員を務める達也さんよりもある意味有名である。

私たち一年197名はあの学園公認のアホに負けたのだ。

「「お、オーマイ&ガーファンクル……」

多分一科生と二科生問わず一年全体が始めて気持ち繋がった瞬間だったと思う。

そんな静まり返る一年生の校舎。

それを突然ぶち壊したのは言うまでもない。

なにやら奇声を発しながらこの教室に向かって来ているようでクラス全員がドアの方に注目した。

そして勢いよくドアが開き、

「いい加減この教室に来るのはやめろ!!!」

森田くんが先制攻撃を仕掛けた。

「のんちゃんのんちゃん!!!テストの結果見たかい!？」

恭ちゃんはスルーをした。

「うん見たよ。理論4位だなんてすごいね」

「ありがとう!!でもものんちゃんの方が凄いよ!!総合2位だなんて、本当にすごいよ!!おめでとう!!」

「ありがとう、恭ちゃん」

「深雪様としーちゃんも総合1位と3位おめでとう!」

ちゃんと知り合い全員にそう言えることは偉いと思う。私だけじゃないんだなって思うと……。？

「僕を無視するな!!!」

かまってほしんだね、森和くん。スルーされてちよつとの間固まっていたし。

「もっくん、後にしてくれるかい?それよりものんちゃん!理論順位見て欲しいんだけど!!」

「え、あ、うん……」

大人しく引き下がる森谷くん。

そして理論順位と言う言葉に固まるクラスメイトたち。

このアホは一体どんなことを言っているのか、特に何も考えてなさそうだけれどみんなは身構えてしまう。男子は特に二科生を見下している人が多いから特にだろう。自分もそう見下されるのではないかと。

「僕とのんちゃん、並んでるんだよ!!!」

そしてそうすぐ嬉しそうに言った。

私の理論成績は学年5位で4位の恭ちゃんと縦に続いている。

「恭弥が嬉しそうにしている理由はやっぱりほのかなんだね」

「それ以外に何があるっていうんだい?」

「ううん、何も。それより恭弥も理論4位おめでとう」

「ありがとう!!スケボー乗るためにめっちゃ勉強したからね!!それが功を成したよ!!!」

その言葉にさらにクラスが静まり返る。

私たち、スケボー乗るために勉強した人に負けるなんて…

「スケボー乗るために一体何の勉強したんだよ!」

もうただのツッコミやん森宮くん。

「魔法に決まってるじゃないか?何を言っているんだいもつくん?」

「な、こ、この!!この、あ、こ、この…この…う、うるさい!!!」

そう言う森沢くんは他の男子生徒の手を肩に置かれ、頷くその生徒を下唇を突き出して頬を引きつらせたような顔で見ると

「ぼ、僕は風紀委員の巡回があるからな、も、もう行くよっ!」

森嶋くんは逃げ出した。

ちなみに今はお昼休憩の時間です。

「ついに来ちゃったね、九校戦…ドキドキする…!」

それから数ヶ月が経ち、八月に入りついに九校戦が始まった。

深雪は当然のこととして、私や雫も無事に選手の一人として選ばれ、念願の九校戦に参加することができた。

驚いたのは、一年で二科生である達也さんが技術スタッフとして参加していること。一年生でエンジニアとして参加することすら初のことなのにそれを二科生なのに達成してしまうだなんて本当に凄いことだ。達也さんの技術を疑う先輩方に実際にCADの調整を行う姿は凛々しくてカッコよかった。あまり詳しくはわからなかったけど、中条先輩曰くプロ顔負けの技術を持っているそう。ただ残念なことには私は二種目出場するのに一種目しか担当してもらえない。雫や深雪は二種目とも担当してもらえてるのに…。

「まずはこの後の懇親会だね」

着くまでに色々トラブルがあったものの私たちは一高生が寝泊まりするホテルに到着していた。

「あ、美味しい…けど食べたことあるような…」

夕暮れ時に懇親会が始まり、私や雫のような新人戦に参加する一年生も参加していた。

特に他校に知り合いがいるわけでもないため、とりあえず雫たちと話をしながら近くに用意されていた料理をとって食べることにした。

それは流石九校戦の懇親会だけあって美味しかったけど、どこかで食べたことあるような、というかいつも食べていたような…そして何故か凄く嫌な予感がして来た…

「それは良かった!!きつとのんちゃんも来ると思ってたのんちゃん好みの味付けにしていたんだよ!!」

「き、恭ちゃん!?!」

うん当たつちやつた。

これは恭ちゃんが作った料理らしく、私のすぐ後ろで満面の笑みを浮かべていた。

私と雫は学校での昼食はいつのまにかいつも恭ちゃんが作ってくれたお弁当になっていた。好きなものなんかは教えたりしたけれど、

好みの味を把握されているとは思わなかった…。というか確かに美味しいとは思っていたけれどこんなところで出せるほどだったんだ…多才なのにほんとなんであんな残念なんだろう…

「…なんでいるの?」

「アルバイトだよ!!しーちゃんにはこれがオススメだよ!!あ、深雪様もご無沙汰しております」

雫の問いにいつも通り元気よく答える恭ちゃん。そしてついできと雫に自身の手料理を勧めてから深雪に挨拶をする。

「というかアルバイトって一体どうしてこんなところで…ああほら、先輩方がみんな見てる。心配そうに見てる。あいつ絶対何かやらかすぞって。私にきちんと手綱を握っておけて。無理ですごめんなさい。」

「なんでこんなところでアルバイトなんかしてるの?」

「エリリに誘われたんだ!!どうせのんちゃんたちを応援しに来るつもりだったし、丁度いいからね!!」

「エリリってエリカのこと?」

恭ちゃんってエリカもあだ名で呼んでるんだ…。そういえばこの前は違う呼び方だったし多分エリカは達也さんパターンだ。

「そうだよ!僕は彼女以外のエリリンは知らないよ!」

うん私も知らない。というかさつきと違う。なんか増えてる。

「あつ…」

すると私はこちらを見ているえつと、あの…そう、森…くんが気がついた。

先程達也さんの方から私たち一高一年の女子がいる方へ深雪がやって来ていた。多分話しかけようとしていたんだと思う。そこで普通あるはずのない恭ちゃんが目に入って少し固まってしまったんだと思う。

「ということとは次の行動はきつと…。」

「な、なんでここにお前がいる「おぬし!!」…な、なんだよ…?」

「やっぱり思った通りだったけれど、恭ちゃんに怒鳴りかかろうとした森…森くんの声を遮るように赤い髪の三校の制服を着た女の子が

声をかけてくる。

それに返事をする森…原くん。

「おぬしではない。そこのおぬしだ」

しかしそれは森足くんへのもものではなかったようで、その女の子はバーテンダーの服を着た恭ちゃんを指差す。

森盛くんは顔を真っ赤にして隣にいた男子生徒に突つかかっ
て行った。きつと三高の人への返事を友人への返事だと誤魔化そうと
してるんだと思うけど見ていた人はみんな笑うのを堪えているみた
い。

「なんだい!?!」

「見たところ選手ではないが一高の生徒であるとお見受けするがどう
じゃ?」

「そうだよ!今アルバイトなうなんだ!」

「やっぱり最近みんな言葉使いがおかしいと思うの。なんで今を二
回言うんだろ?」

「わしは三校の四十九院沓子じゃ。おぬしの名前はなんと言うんじや
?」

「僕はしがないアルバイトだよ!!」

「え、あ、はい…」

そこは名乗ろ?

「そこは名乗れよ!!」

あ、流石ツツコミ担当森々くん。

「ここは九校戦の懇親会だよ?アルバイト風情が名乗ることなんて出
来ないよ!!」

いやそうだけでも。

「別にそれくらい構わんのじゃ」

「そうだよ恭ちゃん、名乗るくらい別に大丈夫だよ」

「そ、そうかい?のんちゃんが言うなら、僭越ながら名乗らせていただ
くよー!」

会場はある程度の広さのため、全員というわけではないが周囲にい
る人たちのほとんどが私たちに注目している。

多分傍から見れば三高の一年生が一高の一年生に宣戦布告しに来たように見えているんだと思う。それもかなり堂々と、だからみんな私たちを見ているんだと思う。

「僕の名前は西郷恭弥だよ!!!よろしくね!!あだ名で呼んでもいけれど恭ちゃんのはのんちゃん専用だからダメだよ!!」

あ、そうなんだ…

「では恭弥と呼ばせてもらおうぞ」

「うん、トウー子ちゃん!!」

でた、変なあだ名。

「どう、トウー子ちゃん…?」

「うん、ダメかな!」

「別に構わんのじゃ!」

あ、いいんだ。不思議な子…。

「それでどうーしたんだい、トウー子ちゃん!」

私は何も言わないよ。きつとツツコミのもり…人がしてくれるはず。

「うむ、それでは言わせてもらおうぞ!」

あ、してくれなかった…。

「どうぞ!!」

何を言うんだろう、四十九院さんは少し息を整えてるみたいにいる。

そして私は次に彼女が言った言葉に動きが止まってしまった。

「お主に一目惚れした!!!好きじゃ!!!付き合ってくれ!!!」

「ごめんなさい!!!」

私の手元にあったグラスはするりと落ちて行つて地面に当たり砕けてしまった。

私たちを見ていたみたいで、恭ちゃんと同じくアルバイトをしているエリカがすぐに駆け寄って来てくれて割れたグラスを片付けてくれる。エリカに謝罪とお礼をすると頑張つてと一言だけ言って戻つて行つてしまった。

そして話は私がそうしている間にも続いていた。

「何故じゃ!？」

「僕には心に決めた人がいるんだ!!!だから悪いけれど…」

「そうだよ、恭弥にはほのかがいるからダメだよ」

わ、私別に恭ちゃんとはそんな関係じゃ…

「大丈夫じゃ、私は愛人に理解がある」

「僕はないけどね!!!」

「それもダメ。愛人枠ももう埋まってる」

え、それはどういうこと、雫…

「なんだって!!!」

いないのね。雫、嘘はダメだよ。

「なぬ!?お主そこまでモテるのか!？」

「そんなことないよ!!!つい最近、先々月の先々月に振られたばかりだよ!!!」

「要するに四ヶ月前というわけじゃな!?結構前じゃな!!」

「そうかな!?もしかしたらそうなのかもしれない!!」

「いや四ヶ月前なら結構前だよ!!てかなんの話してんだよ!!告白してたんじゃない「お主、少し黙っといってくれんかの?今大事な話をしてる最中なんじゃ」…あ、はい…」

最近不憫だね森笑くん。

「して、のんちゃんと言うのはお主のことだな!？」

「え、あ、そ、そうですけど…」

唐突に私に話を振られてつい言葉がつまってしまった。

「出場競技は!？」

「し、新人戦のバトルボードとミラージバットです…」

「ふむ、バトルボードはわしも出場するぞ!!」

「は、はい…」

「宣戦布告じゃ、新人戦バトルボードでわしが勝てば恭弥は貰うぞ!!!」

第9話「もし私も恭弥が好きだつて言ったらどうする?」

「ねえねえばーば、どうして僕は魔法が使えないの?」

僕は魔法が使えない。

学校の友達はみんな使えるのに。

「おやおや、恭弥は魔法が使いたいのかい?」

「うん!だつて福澤くんも諭吉くんもみんな使えるんだよ!」

二人だけじゃない。他にも野口さんとか英世くんとか、仲のいい友達はみんな使える。なんかかつこ良さげなケータイみたいなの使つて。

まだ使えないのは僕だけ。

それに僕だつてそろそろケータイが欲しいよ!持っていないの僕だけなんだよ!?だからいつもみんなお外で遊ぶとき僕だけ呼ばれなくて一人で遊んでるときに発見して寂しい思いをしてるんだ!この前広瀬くんとすずちゃんに「なんでおんねん」って言われたんだから!もうほんとやになっちゃう!

「心の中でもお前は喧しいねえ」

「なんだつて!!!」

「そんなに心配しなくても大丈夫さね。恭弥のお母さんは立派な魔法工学技術なんだから」

「なんだつて!!!でもママンが魔法使つてるところ見たことないよ!」

ママンはいつも機械をガチャガチャ弄つてるだけで魔法は一度も見せてくれたことがない。

…ケータイは!?

「そうなのかい?じゃあ無理だね。さつさと諦めな」

「なんだつて!!!じゃあケータイは!」

「次から次へと本当に落ち着きのない子供だねえ。魔法の話はもういいのかい。これやるよ」

「子供ケータイ!!!」

ふっる!!パカパカしてるやつ!!ばーば何歳なんだろう!!

「なんだい、文句でもあるっていのかい?五十二歳だよ!」

「そんなことないよ!!ありがとう!!それで魔法の話はどこいったの!?話晒さないでよばーば!!」

「晒したのはお前だろ恭弥。全く…心配しなくてもそのうち使えるさね。お前のお父さんはなんてったってあの魔法科高校に通ってるんだからね」

「なんだって!!!ほんと!?」

「知らなかった!!!ぱぱんってすごいんだ!!!そもそも会ったことないけど!!!」

「ああほんとさ。じゃあそのときのために、明日は九校戦を観に行こうか。お前のお父さんの学校も出場するんだよ」

「なんだって!!!ほんと?」

「ああそうさね。お父さんも出場するんだよ」

「なんだって!!!」

あ、でも、

「ママンが、ぱぱんは学生の癖に大事な大会の前日に中に出すだけ出して次の日に交通事故でばーばと一緒に死んだって言ってたよ!!!」

「うるせえ」

「なんだって!!!」

「ってな感じで一回だけ僕も九校戦を観に来ようとしたことがあるんだ!!!」

「怖いよ!!!」

突然語り出したと思ったら一体何!?恭ちゃんは呪われてるの!?それにばーば口悪い!!

「とりあえず一度九校戦に来たことあるってこと?」

雫は落ちついている。流星雫ね。

もう慣れたって感じだね。そりや慣れもするよね。恭ちゃんと出会ってもう四ヶ月ほど経つんだもの。はじめの頃は恭ちゃんの奇怪

な行動に戸惑ったばかりだったけど、雫ほどじゃなくても私もそろそろ慣れてきた方と思う。

恭ちゃんが、その、私のこと好きだって、辱めてくるのはまだ慣れないけど…

「ううん！その後はあちゃん蒸発したから結局行つてないんだ!!!」

「もうやめて!!!」

「やっぱ無理!!全然慣れない!!」

「蒸発して何!?!どう蒸発したの!?!」

「というか結局来てないならなんで話したの!?!九校戦前夜だつてい
うのに関係ないじゃん!!ただのホラーじゃん!!」

「それにそんなことよりもっと大事なことがあるでしょ!!!」

「そういえばほのか、三高の四十九院さんだっけ?に宣戦布告どうするの?」

「そうそれ!それだよ雫!流石雫ね!

「さつきまでの懇親会で私は恭ちゃんに一目惚れしたつていう四十九院さんに勝つたら恭ちゃんを貰うつて宣戦布告されたのだ。」

「恭ちゃんのどうでもいいホラー話よりそっちの方が大事。」

「というかなんで懇親会が終わった後ナチュラルについて来てるんだろう?ロビーだから別にいいんだけど、バイトはいいのかな?」

「どうするつて言われても…どうしたらいいんだろ、雫!?!」

「今私が聞いたんだけど…」

「とりあえず、普通に試合に臨めばいいんじゃないかしら?元から負ける気は無いのだし、お兄様と考えた作戦もあるんだから」

「そうだよね、深雪の言う通りだよね…。でも、もし負けたら恭ちゃん取られちゃうんだよね…。」

「あ、でもそう、そうなの。バトルボードの方は達也さんに担当してもらつてないけど、達也さんに考えてもらつた作戦があるんだつた。だからきつと負けない。負けるはずないんだから。でも本当に達也さん、担当してない競技なのに態々私のために色々考えてくれて、本当に優しくカッコよくて…」

「そうだよ!!それにのんちゃんあんなに練習して来たんだから絶対に

負けたらなんてしないよ!!それに負けても僕の体の所有権がトウ子ちゃんになっても、心の所有権はのんちゃんのものだから大丈夫だよ!!」

「西郷くん、別に負けてもそんなことにはならないし、ほのかもそんなものはいらなと思うわ」

「深雪辛辣」

「そうだね!達也さんの作戦があるんだからね!」

「ほのかスルー!」

「僕もついてるしね!!」

「達也さんがついてるからね!!」

「ほのか、少しは恭弥の話も聞いてあげよ?」

大丈夫、達也さんがいるんだから!

「そろそろ時間も時間だから、部屋に戻りましょうか」

時間は二十時近くを指していた。

まだお風呂も入ってないし、試合はまだ明日にはないけど、そろそろ部屋に戻らないといけない時間だ。

「そうだね、ほのかも行こ。またね、恭弥」

「うん。また明日ね恭ちゃん」

「ばいばい、のんちゃん!!!しーちゃんも!!それでは深雪様、失礼いたします」

「ええ、西郷くん。では、また」

なんで深雪には人が違ったように丁寧なんだろう…。

『Prrrrr…』

あの後みんな温泉に行き、部屋に戻ってきたところで雫の携帯端末が鳴った。

多分電話だと思う。

「誰から？」

「恭弥」

「さつき会ったばかりなのに？」

「よくあることだよ」

よくあるの!?なんで!?恭ちゃんって私の事が好きなんじゃないの!?

いやそうじゃない、そうじゃないでしょほのか!!

恭ちゃんと雫ってそんなに頻繁に通話するような仲だったの!?

「もしもし、恭弥？」

あ、出るのね!部屋の外に出ずそんなあつさりと出るのね!流石雫ね!

『しーちゃーん!!!さつきの会話しーちゃんも聞いてたよね!?参加してたよね!?のんちゃんが冷たかったんだ!!!冷たかったよね!?どうしよう!!!』

うるさっ!声でかつ!恭ちゃんって電話越しでもこんなに声大きいんだ…

というか内容!私そんなに恭ちゃんに冷たくしたかな?それに…やっぱり、わ、私のことについて…なんだ…

「うるさい」

『ごめんね!!!』

ストレートに言ったよ…流石雫ね…

結局うるさいのは変わってないけど。

「ねえ恭弥、聞こえてなかったの？」

な、なんだか雫が怖い…。

『失礼いたしました』

そして恭ちゃんのその変わりようは何なの？

「それで、さつきの会話って、ロビーでのこと？」

『そうだよーやっぱり僕ってのんちゃんに嫌われてるのかな!』

べ、別に嫌ってなんかないよ!?た、ただ私には他に好きな人がいるってだけであって、そんなつもりは…。

というか丸聞こえなんですけど!!!いいの!?いいの聞いてちゃって!?

今更聞こえてるなんて恥ずかしくて言えないから黙ってるしかないんだけど!!

「そんなことないよ。高校に入学してからのほのかの話の三割くらいは恭弥の話だから」

『なんだって!!! 本当かい!?!』

あ、すごい。さっきみたいにくるさくない。テンションの割にちやんとポリューム調節してるんだね。

というか、え? 私そんなに恭ちゃんの話ばかりしてたの!?

『でも三割って微妙だね!!!』

数字的にはそうだけど、四ヶ月間の三割って相当だよ!?

『あと二割くらい欲しかったな!!』

「残り五割が達也さんで、あとは深雪」

『なんだって!!! 流石のんちゃん無慈悲!!!』

もっと恥ずかしいよ!!!

半分も達也さんの話してたの!? 深雪も地味に多いし、というか私入学してから三人ことしか雫に話さないじゃない!!!

「冗談だけど」

『なんだって!!!』

び、びっくりしたあゝ…平然とそんな嘘がつけるなんて、流石雫ね…。

「けど恭弥のは本当。毎日ずっとほのかと一緒にいるけど、恭弥の話をしない日はないよ」

『なんだって!!!』

そ、それは恭ちゃんか毎日毎日しつこいくらい話しかけてくるから…。別に嫌ってわけじゃないけど…。

「それに最近じゃあ久し振りに恭弥のお弁当食べたいなんて話してたりもするんだよ?」

『なんだって!!!』

な、なんでそんなことまで言っちゃうの!?

なんだか凄い辱めを受けてる気分だよ!!!

『でものんちゃんってエレメントの末裔なんだよね!?!もうすでにたつ

つーに依存ぞつこんラブなんじゃないかって心配になるんだよ!!!」
恭ちゃんでもそんな心配するんだ…以外だなあ…。

…いや言い方。べ、別に私はそこまで達也さんのこと…す、好きだけどそんな、そんな、、

「そんな心配しなくて大丈夫だよ。その通りだから」

『なんだって!!!』

そんなことないよ!!なくもないけど!!

「それはそうと恭弥。恭弥は四十九院さんのことどうするの?」

え、聞いちやう雫!?さ、流石雫ね…!

『トウー子ちゃんのここと?別にどうもしないよ?』

「告白されたのに?」

『されたね!!初対面の人に告白する人がいるなんてびっくりだよね!!!』

本当にねー、私も入学式の日にされた時は恭ちゃん殺して私も死ぬかと思っただくらいびっくりしたし。

「今とんでもないブメーラン投げたね」

『なんだって!!!なんで僕が今ブメーランパンツを履いていることに気付いたんだい!?!』

なにその突然のカミングアウト!?

ブーメラン!?男の人ってボクサーが主流じゃないの!?

た、達也さんはボクサーだよね…?

雫のお父さんもボクサーだって言ってたし…あ、でもお父さんトランクスだ…

今度深雪に聞いてみようかしら…

「恭弥はブーメラン派なの?」

『違うよ!!ブリーフ時々ボクサー、月一ブーメランだよ!!』

なにそのこだわり!?

『みつきーはトランクス持ってきてたから全部引き裂いてやった』

なにそのトランクスへの憎しみ!?

どうしよう、もし恭ちゃんとお父さんが出会ったらお父さんがノーパンになっちゃう?!?

「というか恭ちゃんのそのパンツへのこだわりはなんなの…!? 変態さんの…!?」

「それは私でもそうした」

「雫!？」

「恭弥、ちゃんと他のパンツ渡したよね?」

『もちろんだよ!! ブーメランワンボックスがさつきロビーに届いたよ!!』

ワンボックス!？」

「しかもブーメラン!? 自分だつて月一でしか履かないくせになんでワンボックスも!？」

「誰だか知らないけど、みつきーさん…ご愁傷様です…」

「とうかさつきから二人の話についていけない…いや、聞き耳立ててるだけだからついていく必要無いんだけど。」

「よくやった。それで、本当にどうもしないの? 彼女のこと」

『トウー子ちゃんは僕が好きで、僕はのんちゃんが好きで。でもものんちゃんがたつつんが好きで、それでも僕は諦めてなんかいない! のんちゃんが好きだ! もし仮にトウー子ちゃんがそれで諦める程度ならそれまでの話! けどきつと僕と同じだよ! 九校戦で負けたくらいで諦めたりなんてしない! きつとその後トウー子ちゃんは僕に好きになつてもらえるようアタックしてくるよ! それでそうなつたらそれはそれでいいんじゃないかな!? その前に僕とのんちゃんが付き合つたら、トウー子も無粋な真似はしてこないよ!! あ、でもブーメラン三高の人に配ってくれたら嬉しいな!!』

「いきなり凄く語るね! びっくりして全然話聞いてなかったよ!」

「ごめん、急に語り出すから全然聞いてなかった」

「流石雫ね!」

『トウー子ちゃんは僕が好きで、僕はのんちゃんが好きで。でもものんちゃんはたつつんが好きで、それでも僕は諦めてなんかいない! のんちゃんが好きだ! もし仮にトウー子ちゃんがそれで諦める程度ならそれまでの話! けどきつと僕と同じだよ! 九校戦で負けたくらいで諦めたりなんてしない! きつとその後トウー子ちゃんは僕に好き

になつてもらえるようアタックしてくるよ！それでそうなたらそれはそれでいいんじゃないかな!? その前に僕とのんちゃんが付き合ったら、トウ子も無粋な真似はしてこないよ!! でも、ブーメラン三高の人に配ってくれたら嬉しいな!!!』

お、同じこと繰り返すのね。まとめるとかじゃなくて…。

べ、別に文字数稼ぎなんかじゃないんだからねっ?!…私誰に何言ってるんだろ。

というか一箱も買うからだよ！一箱いくつ入ってるか知らないけど他校に配れるくらい余ってるじゃんパンツ!!

「もし私も恭弥が好きだつて言ったらどうする?」

『え、やだ、恥ずかしい…』

乙女！なにその反応!!

それにそこはいつもみたいに「なんだつて!!」じゃないんだ!?

というか、え?え?寒、ほんとなの…?

「冗談だけど」

『なんだつて!!!』

よ、よかつた!、冗談だつた…流石寒ね。…あれ?よかつた?

『どうしてそんな冗談をいうん…はっ!のんちゃんのオーラを感じる…!?!』

え、急に何?オーラ?何が?

『しーちゃん!もしかして隣にのんちゃんがいるのでは!』

気づかれた!?!どうして!?!オーラ!?!恭ちゃんには何か見えてるの!?

電話越しのくせに!!というか恥ずかしいよ!!

「恭弥にしては気づくのが遅かつたね」

『なんだつて!!!』ということは…もしかして、今の会話全部聞かれてたのかい!?!』

あ、ほんとに気づかれた…な、なんだかとても恥ずかしい…。

「うん。だつてスピーカーだもん」

『なんだつて!!!』

「おかしいと思ったよ!どうして恭ちゃんが途中で声のボリューム下げたのに話してることを全部聞こえてくるのかなつて…!!!」

「それはね、ほのか。スピーカーだったから」

「さっき聞いたよ!?!」

『のんちゃんの声でした!!』

「隣にほのかがいるからね」

『さっき聞いたよ!?!』

それなら雫は私に聞こえてるのが分かった上で全部話してたって
いうことなのね…いさ、流石雫ね…い

「恭弥もほのかに気づいたことだし、せつかくだから三人で話そ」

「そ、そうだね。今日はすぐには寝れそうにないし」

主に雫と恭ちゃんのせいだ。

『やった!!寝る前にのんちゃんと話せるなんて!!』

「そう思うなら私じゃなくてほのかに電話したらいいのに」

「し、雫!?!」

『そんなの恥ずかし過ぎて死んじゃうよ!』

「別にいいんじゃない?」

『なんだって!!』

「あ、パンツは配らないでね」

『でもたつつん達はボクサーがあるからいらないうって頑なで…』

「達也さんはボクサー!!」

「ほのか…?」